

246
42
23

毛利十一代史

第三册

自萬治二年
至寬文二年

毛利十一代史

第三册

泰巖公記

毛利十一代史卷之七

泰巖公記七

大田報助編



萬治二年己亥正月朔日公萩城ニ在リ歳首ノ儀前年ノ如シ

按ニ承應元年正月綱廣公御代初江戸邸ニ於テ行レタル新年規式ハ已ニ詳記セリ

只在國ナルヲ以テ御雜煮式御小座敷御諸初謁見等ニ出席スル人員及ヒ寺院一門
各家へ臨訪等ノ異ナルノミ

八日兒玉淡路元恒ノ江戸當役ヲ免ス先公以來其職ニ盡瘁シ數年江戸在勤セシヲ以
テナリ堅田安房就政久ク地當職勤務去々年俄然出府セシニ本年モ公ノ參府ニ隨從
シ江戸用方勤ムヘキヲ命ス按ニ兒玉淡路ニ益田修理就固今年參府陪從ヲ命セラル
江戸加判ナリ

十一日諸代官近年公在府中特ニ勉勵セシヲ以テ賞米ヲ賜フ差アリ

十三日ヨリ二月三日迄ノ間公兒玉淡路堅田安房清光寺板本遠江兒玉三郎右衛門繁澤二郎兵衛ノ家ニ至リ饗應ヲ受ケラレ賜品又各家ヨリ献物差アリ

十八日毛利右京綱元今年ヨリ年首登營ノ命アリ拜禮ノ日病アルニヨリ本日太刀ヲ献シ將軍謁見時二十歳大廣間表四品ノ次ニ着坐

二十六日夫人於江戸青山邸分娩女子誕生名良子分娩七夜ノ祝トシテ公及夫人出生ノ姫君ヘ江戸御一両中ヨリ進品并諸臣以下ヨリ献物付立アリ

二月二日佐世仁藏ト毛利宇右衛門娘縁職ノコト先ニ申請セシニ今日聞老ヨリ許可ノ命アリ此時間老ヨリ指令ニ公ノ家ヲ繼カレシハ幼齡ノトキナレハ家臣三千石以上ノ者ハ女子婚嫁ノ事ヲハ願ヒ出テ允可ヲ受クヘシト將軍家ヨリ令シ置レケレトモ今回公御入國ニテ領政ヲ親裁セラル、ニ因リ以往ハ允裁ヲ乞ニ及ハストナリ

四日山内治部跡職實子九郎兵衛ニ命シ采地ヲ領セシム

十一日梨羽與三右衛門ニ記録所用務ヲ命ス大和式部ヲ奥番頭役ト爲ス御手廻物頭二人宛江戸三番ニ交替セシムルモ去年ヨリ公往復ノ時輕卒ニ不足ヲ生シ今年ヨリ

三人宛二番ニ命セラレ本番手藤井長右衛門岡部半左衛門ニ國司太郎左衛門ヲ加ヘ從行セシムルコト、セリ大組物頭内藤又右衛門死去又右衛門組ハ林喜右衛門ヲシテ管セシム公儀人飯田平右衛門口羽又兵衛二人交番セシニ渡邊小右衛門ヲ飯田平右衛門ニ添ヘ出府ヲ命セラル

同日本城構造始マリ助役大名七人ニ命ス

十六日國司與三兵衛ヲ江戸ニ遣シ君夫人分娩後ノ狀ヲ候セシム

同日公萩城出程近キニアリ數十條ノ令ヲ發シ陪從ノ士卒ヲ減メラル去年江戸發途ノトキニ同シ

日不詳江戸在勤ノモノ、給米金規程左ノ如シ

一今年米高直ニ付江戸御番手之者共難續可有之との儀に付債相銀之内少下ケ分限當り前之人數積りを以千五百石より下無給迄もあひ取之分は御扶持方可被遣之旨被仰出候就夫被遣來候催相登人前に付登分五厘宛減少仕御扶持方江戸着口より逗留中被遣候事

付千五百石より上之分限は御扶持方不被遣催相銀此中之分に被遣候事

付江戸京大阪之役人何も増扶持被遣分は今度之御扶持方不及御沙汰御催相銀増扶持最前之分に被遣候事

付江戸三番に被仰付者には三番も相被遣來候然共殿様御上下被遊候故廻り

三番は此節之二番より御番廻り近候故二番もあひに直し被遣候事

一御家來馬少候故貳百四十石通りより上は江戸番之時馬所持候様にと被仰付候

馬もあひ被遣様之事

貳百四拾石より貳百九拾石迄は

馬もあひ口付貳人之御扶持方御心付共に被遣候事

三百石より三百九拾石迄は

馬もあひ口付壹人之御扶持方御心付被置候事

四百石より四百九拾石迄は

馬催相計被遣候事

五百石以上は自力にて馬持候様にと被仰付候事

付大組之儀は馬催相口付之心付は御家中助銀を以遣し御扶持方計公儀より被遣候事

以上

十九日加増高百石宛山内左近村上主税同五拾石河野又兵衛ニ賜フ數年ノ功勞ニ依リ本年末ヨリ支給同百石宛國司隼人篠川外記梨羽與三右衛門大和式部福間彦右衛門同八拾石宛林喜左衛門小林八郎兵衛同五拾石宛井上七郎左衛門栗屋七郎左衛門八木甚兵衛ニ賜フ數年ノ功勞ニ依リ江戸在勤ニツキ去所務ヨリ支給石黒又四郎數年無給ニテ勤務去九月以來ノ扶持方返還知行高百六拾石ヲ賜フ江戸在勤ニ付キ去所務ヨリ支給

二十六日夫人分娩ノ報江戸ヨリ到ル群臣登城之ヲ賀ス公謁ヲ賜フ

同日當職板本遠江外五名ヨリ御鷹方都合市川七右衛門佐世與三左衛門へ奉文令條左ノ如シ

覺

一今度御鷹方都合御方兩人ニ被仰付市川七右衛門ハ江戸被召連佐世與三左衛門儀ハ御國ニ可被殘置候自今以後ハ各番ニ仕江戸御國共御鷹方御用可相勤之旨候萬事多儀候間随分念ヲ入其沙汰可仕之通被仰出候事

一御鷹匠衆其外諸役人面々之御役晝夜共ニ無緩途其御候様ニ手堅可被申付候自然如在仕者於有之ハ可被申出候御究之上斷之道無之候ハ、一廉可被仰付候抽余并精ヲ入候もの有之は是又可被申上候應其品御褒美をも可被下候事

一御鷹之儀は大段御物入有之儀候諸役人之手前萬僉議肝要候可成ほどは費無之様に心遣可被仕候尤何れへも能々可被申渡候事

右之通被仰出候間以此辻萬事有可沙汰候以上

萬治貳二月二十六日

二十七日山添宗積先ニ拾五人扶持現米八拾石支給セラレタルモ去年末ヨリ現米百六拾石ヲ賜リ扶持方ハ給セス加増高五拾石ヲ井上六郎右衛門ニ賜フ數年作事方命

セラレ今年岩脇又右衛門替リトシテ上阪セシメタルニ因リ去所務ヨリ支給加増高百石厚母七郎兵衛同五拾石宛波多野六兵衛中島忠兵衛兒玉藤右衛門村上七兵衛長井七左衛門同三拾石宛佐伯八郎右衛門波多野四郎兵衛同拾六石四斗宇野忠右衛門ニ賜フ本年末ヨリ支給

二十九日公東親ニ臨ミ黒印ノ合條ヲ當役毛利宮内毛利隱岐益田越中兒玉淡路板本遠江へ授ケ之ヲ諸臣ニ頒布セシム

箇條

一我等幼少之時兩國無相違被爲拜領其上去年忝被成御詔御暇被下入國難有仕合候然ハ至留守在國中家頼之諸士以下萬事依相嗜無恙候勿論從前々之制法各雖令相守當時に難指向事少々可有之條箇條令増減可改之處品々之事短慮に難定遲引候迫て相考濃々可申聞候其内は近年之法規彌以可相守候事

一天下御法度之旨彌堅可守候若於有違背之輩は可令行嚴科事

一從先年度々相究きりしたん宗門之事去年御暇被下候刻別て被入御念依被仰渡

其旨堅申聞といとも彌向後も無緩五人組内互令僉議自然無心許者於有之は早速到奉行所可言上事

一分國中上使御通并御飛脚往還御物運送不嫌晝夜可馳走候於緩族は可爲重科事一今度は始て之依入國諸士下々至迄萬事取繕風躰に候自今以後は屋作衣裳或は祝言之調度或は振舞膳部其外諸道具之物好等隨分際萬可令儉約事

一御軍役之人數并武具馬具何も應分限常に相嗜遂其節之覺悟不可有懈怠事一諸事役儀申付輩面々之職寸事も不可有緩怠事
右之條々堅可相守之通可申聞者也

亥二月二十九日

御黒印

同日公萩城ヲ發シ參府ノ途ニ就ク東觀ノ時節昨年冬廣レシニ來年四月是日毛利宮中參府アリテ可然ト執政指令アリ内ノ家ニ臨ム

古老筆記云公ノ初年毛利宮内少輔就方ヲ信重セラル參府ノ首途ゴトニ必ス就方ノ家ニ臨ミ以テ祝式トナス

萬扣云大組ハ清水長左衛門就信組四拾六人共御手回ハ繁澤二郎兵衛就充組共隨從セリ

三月朔日朝山口御着同日山口ヲ發シ三田尻ニ至ル

二日毛利六郎左衛門跡職實子八郎左衛門ニ粟屋勘左衛門跡職養子猪兵衛ニ松井一郎兵衛跡職實子半三郎ニ桂筑後隱居實子與三右衛門ニ井原筑前隱居實子八右衛門ニ井上九郎兵衛隱居實子長兵衛ニ井上忠左衛門隱居實子忠三郎ニ布施忠兵衛隱居實子七兵衛ニ安田長兵衛隱居實子忠右衛門ニ岡本五郎左衛門隱居實子七左衛門ニ大多和惣兵衛隱居實子又兵衛ニ綿貫二郎右衛門隱居實子孫左衛門ニ檜崎權兵衛隱居實子甚左衛門ニ中村正左衛門隱居實子九兵衛ニ福井助左衛門隱居實子吉兵衛ニ内藤彌兵衛隱居實子半兵衛ニ福原五兵衛隱居養子又四郎ニ飯田長兵衛隱居實子勘兵衛ニ仁保平右衛門隱居養子金右衛門ニ羽仁丹後隱居養子七郎右衛門ニ岡澤勘右衛門隱居實子忠兵衛ニ中村新右衛門隱居養子嘉兵衛ニ粟屋二郎右衛門隱居實子左介ニ景山五郎左衛門隱居實子一郎右衛門ニ命シ采地ヲ領セシム

同日公三田尻上船九日大阪着船十日夜淀船ニ搭シ十一日伏見着公竹子姫公ノ妹慶司房輔公ノ室
ノ京都ヨリ來ルヲ以テ深草ノ法塔寺ニ至リ之ニ面ス

十二日國司太郎左衛門中間喜左衛門大津ニ於テ死刑ニ處セラル公參府ノトキ大津
傾城町ニ於テ下横目ニ發見セララル、故ナリ

二十日江戸證人穴戸八助替トシテ毛利吉十郎參着二十二日證人奉行ニ至リ太刀小
馬代ヲ納ム二十五日證人奉行ノ傳達ニヨリ八助吉十郎登城吉十郎太刀小馬代ヲ献
ス閣老ヨリ八助ニ歸國ノ傳命アリ吳服ニ羽織一ヲ賜フ

二十二日公箱根ニ館ス去十一日萩地回祿ノ災アリ蓮花寺ノ邊光明坊清光寺接近田
町迄諸臣宅十四町家百三十六寺六灰燼ニ歸スルノ報萩ヨリ至ル

二十五日公江戸御着櫻田邸ニ入ル即日執政各家へ回訪セララル
二十六日將軍稻葉美濃守ヲ使トシ速ニ參府ノ勞ヲ慰ス

同日江戸在番ノ大組二十五人目付一人物頭二人右筆一人ヲ召シ膳具ヲ賜ヒ歸國ノ
命アリ二十八日江戸ヲ發ス

四月三日公登營謁見献物左ノ如シ

一太刀大馬代 一裕十

按ニ列侯參府ノ時進品定例アリト雖モ去々年府下火災ノ後進献減少スヘキ幕令
アリ是以今回ノ献物只如此又家老一人隨從スヘキノ内諭アリ於是毛利隱岐隨從
進調太刀小馬代ヲ献ス近年ハ此事ニ就テ家老ノ拜謁ハナキコトナレトモ越前家
并ニ松平相摸守細川越中守ナト始メテ參府ノ時家老一人謁見セシ例アルヲ以テ
閣老へ窺ハレシナリ

五日將軍西尾藤兵衛ヲ使トシ鷹捉ノ鵜ヲ賜フ

九日乃美五左衛門へ加增高百石ヲ賜フ數年江戸在勤ノ功勞ニ因テナリ小川宗順龔
ニ十人扶持現米八拾石ヲ支給セシニ去年末ヨリ改テ現米百五拾一石ヲ賜リ扶持方
ハ給セス

十一日公閣老松平伊豆守酒井雅樂頭阿部豐後守稻葉美濃守ヲ歷訪ス本年二月二日
家臣三千石以上ノ縁職允許ヲ請ハス自我ヲ許サル、ヲ謝スルナリ

十六日異本一曰 公及夫人姫君松平越前守ノ邸ニ至リ盛大ナル饗應ヲ受ク二十三日越前守ヲ我邸ニ招キ饗宴ヲ開カル是レ結婚後初テノ祝宴ナリ

五月七日飯尾肥後跡職實子久右衛門ニ命ス久右衛門大組ニ付セラル

十三日江戸御留守居毛利隱岐就頼去年夏出府今年迄勤務今日暇ヲ賜リ歸國セシム

同日諸臣屋敷拜領ノ件ニツキ地當役中ヨリ江戸隨從ノ老臣へ照會書ニ對シ江戸老

臣ヨリ回報又七月二十八日江戸老臣ヨリ地當役中へ報告書アリ略ス大記 卷二

按ニ承應二年正月二十三日國內屋敷宛ニ關シ國老ヨリ屋敷奉行へ授ケシ條書ア

リ參照スヘシ

十八日井原四郎右衛門病死跡職秀就公ヨリ父彈正忠へ賜ル證判ノ旨ニ因リ知行千

三百三十拾石ハ兄井原與三左衛門領地二十石ニ加へ三千三百三十拾石ヲ賜ハル

六月十六日嘉祥式行ハル公登營例ノ如シ

十八日能美太郎右衛門死去在生中孫彌四郎へ跡職ヲ命セラレント請フ彌四郎年十

三ナルヲ以テ知行八拾石之内五拾五石ヲ賜ハル

二十二日御一門中及松平出羽守ヲ招キ過日鶴ヲ賜フノ宴ヲ開ク出羽守病アリ四月

二十三日松平越前守招請ノ祝宴ニ來ラサルヲ以テナリ

二十三日評定所へ諸家留守居ヲ召シ閑老ヨリきりしたん宗門制禁ニツキ幕合ヲ傳

フ左ノ如シ

覺

一きりしたん宗門之儀密々今以可有之間家中之輩中間小者に到迄常々無油斷可

被申付候勿論奉公人出替之刻は請人に念を入宗旨を改可被相抱候事

一百姓町人は五人組旦那寺を彌相改不審成宗旨於有之は可被遂穿鑿事

一吉利支丹御制禁之高札明暦元年八月相立候經年序文言見へかね可申候新敷書

直可被立候事

以上

亥六月十九日

按ニ本年三月三日宗門奉行北條安房守諸家留守居ヲ召シ宗門ニ關シ各家へ幽囚

ナキニヨリ家祿ヲ沒收ス

十一日姫宮ヲ御臺所ト改稱セシヲ賀シ將軍へ銀三拾枚ヲ献セラル

十二日大城ニ於テ慶宴ノ能舞アリ公列侯ト登營拜觀

二十五日坂七右衛門跡職實子七之介ニ命ス七右衛門病中迄數年勤務セシヲ以テ七之介幼少ナルモ知行五拾七石之内四拾石ヲ賜ハル佐々木長藏病死ス生前ノ請願ニ依リ養子辨之介へ跡職ヲ命ス

依リ養子辨之介へ跡職ヲ命ス

二十七日幕府證人奉行酒井紀伊守ヲ免シ渡邊丹後ヲシテ之ニ替ラシム依テ證人毛利吉十郎毛利一郎兵衛丹後ノ家ニ至リ太刀小馬代ヲ納ム毛利主膳證人ヨリハ使ヲ以テ箱肴一種ヲ贈ル其他證人ノコトハ公用人ヲシテ報告セシム

十月二日九月十六日長門見島へ朝鮮ノ漁船一隻漂着ノ報國許ヨリ到ル之ヲ幕府ニ申告ス

同日過日證人奉行ヨリ證人等其祿高ヲ具上スヘシト令アリ依テ左ノ如ク申報セラル

松平大膳大夫家來證人差出候分限付立

一六萬石

一壹萬三千石

一六千石

一壹萬千石

右四人ノ證人當地定詰

一五千石

一六千石

一七千石

右三人之證人ハ替リ番ニ被仰付一人宛當地ニ相詰罷在候

萬治元年
十月二日

十五日公増上寺ノ防火ヲ命セララル前年ノ如シ

美濃事

吉川

右近事

毛利

益田

益田

益田

益田

益田

益田

益田

益田

益田

益田

益田

益田

益田

益田

益田

益田

内藏 助證人

主膳 證人

宮内 證人

越中 證人

越中 證人

越中 證人

越中 證人

越中 證人

越中 證人

越中 證人

越中 證人

越中 證人

越中 證人

越中 證人

越中 證人

越中 證人

越中 證人

越中 證人

人ノ錄上ヲ指命セシニヨリ江戸老臣ヨリ國元へ報告ノ末其書立ヲ安房守へ提出
セラル宗門嫌疑者六人ハ初倉清左衛門三輪勘右衛門黒瀬平兵衛河屋孫右衛門近藤長左衛門紺屋九郎右衛門ナリ

二十四日松平越前守夫人使用セシみつ岡野粟屋猪兵衛ヲ採用シ扶持方六人切米二十石ヲ賜ヒ越前夫人へ付セラル

二十六日毛利刑部少輔元知長府ヨリ清末ニ移ル清末系譜

二十九日先ニ萩濱崎船主ヨリ住吉社地請願ヲ允許シ萬治元二兩年ニ社祠建築竣功セシヲ以テ戎森ヨリ濱崎ニ遷宮本月初テ祭典ヲ行フ

七月九日將軍鷹捉ノ雲雀三十ヲ賜フ公拜謝如例

十四日長崎ノ市人等新錢ヲ鑄シテ外國互市ノ用ニ供セント請フ之ヲ許ス但シ古錢ノ文字寛永通寶ノ文字ヲ用ルコトヲ禁ス

二十一日粟屋勘兵衛數年御手回物頭ヲ勤務セシニ家計困難ニツキ職務願ノ如ク免セラレ大與ニ付セラル勘兵衛所管ノ輕卒ハ和智源兵衛ニ管セシメ御手回ニ奉仕セシム赤川勘兵衛跡職實子勘左衛門ニ命ス

二十三日紀伊卿宰相光貞卿ノ室和歌山城ヨリ江戸ニ着スコレヨリ後諸大名皆室家ヲ江戸ニ迎フ之ヲ國ニ置クコトヲ敢テセサルニ至ル徳川史五代

八月二十六日外廓ノ門番ヲ命ス虎門筋遠門御成橋數寄屋橋淺草門小石川口牛込口市谷口四谷口土岐山城守前共二十一ヶ所ナリ

九月朔日徙移ヲ賀シ萬石以上ノ輩各調度ヲ献ス皆競テ精巧ヲ極ム公屏風十雙ヲ献セラル毛利右京ハ黄金燭臺二十本毛利日向守ハ手拭掛毛利刑部少輔ハ毛氈十枚

二日松平越後守外數人ヲ招キ七月九日賜雀ノ祝宴ヲ開カル

三日將軍へ重陽ノ吳服ヲ献セラル

五日將軍西城ヨリ本城ニ移ル公登營閣老ニ謁シ之ヲ賀ス今日ヨリ姫宮ヲ御臺所ト稱ス諸役人ノ席ヲ定メ諸局ニ條制ヲ下ス是皆本城ノ殿舎新成スルニ依テナリ

七日公列侯ト皆登營本城ノ移徙ヲ賀シ太刀目錄ヲ献セラル八朔ノ例ノ如シ

八日吉川内藏助ヨリ本城移徙ヲ賀シ錫子鉢三十ヲ献ス

同日江戸在勤石黒又四郎發狂シ池上ニ於テ從者二人ヲ斬殺シ其身モ割腹セリ嗣子

ナキニヨリ家祿ヲ沒收ス

十一日姫宮ヲ御臺所ト改稱セシヲ賀シ將軍へ銀三拾枚ヲ獻セラル

十二日大城ニ於テ慶宴ノ能舞アリ公列侯ト登營拜觀

二十五日坂七右衛門跡職實子七之介ニ命ヌ七右衛門病中迄數年勤務セシヲ以テ七之介幼少ナルモ知行五拾七石之内四拾石ヲ賜ハル佐々木長藏病死ス生前ノ請願ニ依リ養子辨之介へ跡職ヲ命ヌ

二十七日幕府證人奉行酒井紀伊守ヲ免シ渡邊丹後ヲシテ之ニ替ラシム依テ證人毛利吉十郎毛利一郎兵衛丹後ノ家ニ至リ太刀小馬代ヲ納ム毛利主膳證人ヨリハ使ヲ以テ箱肴一種ヲ贈ル其他證人ノコトハ公用人ヲシテ報告セシム

十月二日九月十六日長門見島へ朝鮮ノ漁船一隻漂着ノ報國許ヨリ到ル之ヲ幕府ニ申告ス

同日過日證人奉行ヨリ證人等其祿高ヲ具上スヘシト令アリ依テ左ノ如ク申報セラ

松平大膳大夫家來證人差出候分限付立

一六萬石

美濃事 吉川内藏助證人

一壹萬三千石

右近事 毛利主膳證人

一六千石

毛利宮内證人

一壹萬千石

益田越中證人

右四人ノ證人當地定詰

一五千石

穴戶土佐證人

一六千石

毛利伯耆證人

一七千石

毛利丹波證人

右三人之證人ハ替リ番ニ被仰付一人宛當地ニ相詰罷在候

萬治元年

松平大膳太夫内

十月二日

飯田平右衛門

同

渡邊小右衛門

十五日公増上寺ノ防火ヲ命セラル前年ノ如シ

二十三日將軍柘植平右衛門ヲ使トシ鷹捉ノ鶴ヲ賜フ二十五日將軍ノ使者ヘ小袖三
二種兩樽ヲ贈ラル

十一月十日御船手組頭村上三郎兵衛跡職實子一格ニ命ス一格弱齡ナレトモ筋目ニ
ヨリ三郎兵衛所管ノ組ヲシテ一格ニ管セシム

十五日普請奉行道奉行ニ令シ町續キ農民ノ所有地ヲ武家ノ宅地又ハ町家トナシタ
ル分悉ク武家ノ宅地トナス

十九日松平越後守其他親睦ノ諸家ヲ招キ賜鶴ノ慶宴ヲ開ヒテ之ヲ饗應セラル

二十二日將軍重陽ノ内書ヲ賜フ此日賜鶴ノ報萩ニ到ル諸臣登城之ヲ賀ス

日不詳慶安四年十一月六日足輕以下木屐ヲ制禁セラレタリ今回高木屐ノ外禁令ヲ
解除セラレタルモ家臣ニ對シ敬禮ヲ失セサルヘシトナリ柿並年表

十二月朔日益田修理就固孫左衛門ト改稱セリ酒井修理佐竹修理ニ碍アルヲ以テナ
リ

四日鷹司房輔公室竹子姬分娩男子生誕

十三日幕府明年四月日光社參供奉ノ輩從者ノ制ヲ定ム

二千石以上一萬九千石迄ハ半役二萬石ヨリ四萬石迄同前五萬石ヨリ九萬石迄ハ馬
上三十騎鐵砲八十挺弓二十張長柄六十本旗三本十萬石以上ハ馬上四十騎鐵砲百挺
弓三十張長柄七十本旗五本其他之ニ準ス又馬具ノ虛飾ヲ禁シ從者若黨以下ノ衣服
定制ヲ守ラシム此日淺草川新橋成ル名ケテ兩國橋ト云

二十六日福原九郎右衛門跡職實子勘兵衛ニ福間藤左衛門實子勘六ニ小川市右衛門
跡職實子市兵衛ニ命シ采地ヲ領セシム

二十七日伯耆國大仙觀音堂造營奉加ニ關シ上野本實成院ヨリ請願セリ先年大仙諸
堂建立ノ時先公御寄附ノ例ニ依リ公ヨリ銀拾枚諸臣及人民ヨリ百五十枚寄附アリ
本記拾遺附錄

二月七日去年分諸給領物成ノならしヲ達セラレ足米勘渡ハ御運送米平シ直段ヲ以
テ米銀ノ間望次第支給セラルヘキノ旨板本遠江ヨリ三田尻三組頭及都合役へ通牒
左ノ如シ

一筆申入候去年分諸給頭物成之ならし此節申付候處四ツ五步七朱余に當り申候就夫去御浮米四ツ六步之勘合にして足米勘渡申付筈候然は御藏入去御物成惡敷候付只今米にて渡候事不相成候銀子にて成共此節うけ取申度と申衆之分は大坂御運送米平し之直段銀百目に付貳石貳斗五升に當り申候去物成在郷より銀子にて相調候分も公儀え右之直段にして被召上候條銀子にてうけ取度と申衆候は右之和市にして勘渡可申付候米にてうけ取申度と申衆之分は此節渡候事不相成候條今月より四月中迄之間に米短束にて勘渡可申付候條此段御組浮米取衆人御船頭衆之内浮米取え被仰渡米銀間いづれにて請取可申通付被申付御藏元被差出中島忠兵衛兒玉藤右衛門迄可被差出候爲此如是候恐惶謹言

二月七日

榎 遠 江

浦 孫 兵 衛 格

村 上 三 郎 兵 衛 格

村 上 掃 部 格

波 多 野 源 兵 衛 格

大形右之御文牒にて大組八組の月番益田隼人繁澤二郎兵衛兒玉三郎右衛門益修理御手紙三通并兒淡路椿隼人方浮米之儀右兩人え直に御手紙遠江殿より被遣候

三月十三日郡奉行諸那へ巡視ノトキ訓示左ノ如シ

覺

一殿様去年初て被遊御入國無程被成御國廻候處御茶屋普請并道橋人馬等に至迄地下より御馳走申上神妙に被思召之通被成御意候條此段具に可被申聞事
一近年御藏入御物成奉定に被仰付損亡有之所は申出次第檢見申付候然所百姓等之内賣買にかゝり耕作仕付候時分より不入精を候故到秋作り損檢見を請申儀太以不謂儀候若萬事耕作一篇に入精候儀肝要に候耕作を脇えなし材木薪或は賣買計にかゝり居候百姓之儀は地下より可申出候依品其身をは曲事に申付訴人えは褒美等可遣候條此段可被申渡候事

一旅人え宿貸候儀一宿之儀は不苦候二日共逗留仕候は、所之庄屋え申出代官被居合候は、庄屋より可申届候たとへ一夜之宿にても不審なる躰見及候は、早速可申出候此段御所務代衆え渡置候ヶ條に有之候へ共所々より猥成様に承及ひ候條手堅可被申渡候事
右之前於郡中可被申渡候以上

三月十三日

榎 遠 江
益 越 中
毛 宮 内

兒玉傳右衛門左

篠川 六 兵 衛 左

右牧野五郎左衛門え渡置候ヶ條彼方病氣に付御手前え相渡させ候此ヶ條を以相違無之候條於郡中堅可被申渡候以上

三月十三日

榎 遠 江

篠川 六 兵 衛 左

右郡奉行衆郡廻り之時ヶ條に如此奥書させられ被遣候事

四月十九日去年凶荒ニヨリ御國內米少く諸民困難ニツキ訓令之趣地當職ヨリ江戸當役ニ通牒左ノ如シ

追て得御意候去悪年に付て太躰御國中に米少く賣米御座有かね候故諸奉公人町人百姓等に至迄以之外痛縦銀子所持仕ものも賣米一圓無之候へは令買得候儀不相成碯及難儀候通承及候付公儀より諸所え米短束に遣し他國米買せ町人百姓又は奉公人えも面々配當申付賣せ申様に御座候處に漸此節は麥にも取付申候條最早在々は別條有之間敷様に相聞へ申當麥作之儀も中々例年之様は無之由候然共去年之麥作は悉不熟仕候去春之麥作引くらへ候得は當年は實入などは能有之由候就夫先在々苗代荒おこし等は太形仕廻申之由候右申候様に在々も殊之外痛強其上麥作も悪敷御座候と相聞申付て當所町人共をも公儀より北國え米短束又は豊後邊え麥買に頼に差遣し御國中須佐江崎瀬戸崎肥中下關方角にても米買せ申

候所に右之所にも米無御座濱田邊えも平田猪右衛門遣方々にて買得仕候米直段大形銀百目に付壹石八斗二三升程漸々あたり申候に付當所町人在々百姓等へも此節は壹石八斗和市にして賣せ申候先月下旬之比は買米も一圓無之苦々敷存候所今月始比より右之分に少々令買得候不入儀にて御座候へ共諸所にて米短束又は御國中人民之痛之程自然公儀御沙汰も御座候てはと存爰元之様子得御内意候地下へも當年は大分作飯米貸付申候只今迄は別條無御座候彌當地無異儀植付候様との心遣ひ仕事候郡奉行御藏元兩人諸代官衆も無緩せ別て精を出し被申候自然御沙汰之節は卒度御耳へも被立置可被下候恐惶謹言

卯月十九日

榎 遠 江

堅 安 房 格
益 修 理 格

尙々四國九州表雲州隠岐方角にも米穀高直にて萬民痛申之通承候御國中計にても無御座之由候以上

十二月十九日當秋以來早天畑作収獲ナシ諸民飢餓ニ及フモノアルヘク因テ救恤ノ件ニ關シ地頭職ヨリ江戸當役へ報告ニ對シ江戸ヨリ回報左ノ如シ

去二日之御狀令拜見候御兩國當御物成如形に候て頼に諸郡共に皆濟之由可然存候左候へは島物之儀は當秋已來打續日てり候故敷無所務之仕合にて殊外在々痛申之由就夫島銀皆濟相成間敷と諸代官衆申候通被仰越何共苦々敷存候如仰御納所之儀は不相成候へ共百姓等は雜穀物にてこそ堪忍仕物に候處右之通候は、及飢候者も可有之様に存候左候時は何とそ公儀より御救不被遣候ては相成間敷様に思召候通尤に存候何も餓死に及び申ほととの儀に候へは少々之御貸付など無之候ては取續相成間敷と於此地も沙汰仕儀候何とそ麥作時分迄取續候様に御心遣ひ肝要之儀に候米直段も思召より高直之由公儀御買米銀百目付而貳石三斗五升御定候へ共脇々直段能候故揚井平田手前えは纒買取候通左様可有御座と存候下目杯も島作惡敷米高直候通に候は、御國浦々へも他國之米買船大分可參様に存候付御國中高直之段も無餘儀存候今年なとも秋廻り賣米大切にて下々以之外難

儀仕たる由候へ共貴様御心遣ひ故且々取續申之由候何も御すくひ不被成候へは
下々飢申様に可相成候間彌御買米などの御手遣ひ被仰付候て可然存事候大豆高
直に付三田尻山口佐々並木駄賃馬飼口難成躰に候萩町駄賃馬も可爲同前と思
召候付御沙汰候て米銀之間少宛之御貸付可被仰付様に思召之通尤存候大豆銀百
目に二石之内外仕様に候は、馬持難儀に及可申と存候彼是以貴様御心遣ひ中々
不大形儀と申事候恐惶謹言

十二月十九日

堅 安 房
益 孫左衛門

榎 遠 江 檜
御報

二十日本年は諸國島地凶歉ヲ告ケ國內ヨリ他國へ食物販賣禁止ノ通牒左ノ如シ
一筆申入候當年は諸國共島作悪敷有之付て他國人御國之大小豆麥粟ひへそは其
外野菜等迄買取申之由風聞候左様候へは彌御國中痛申儀に候間自今已後は他國
人へ一切賣不申様にと御藏入給領共に申觸候付自然他國人え賣申儀旁被聞付候

は、差留可被申候随分被懸心に脇より不仕様可有御心得候爲此申入候恐々謹言

十二月二十日

榎 遠 江

諸所御茶屋番

- 勝間田權左衛門左
- 矢田又右衛門左
- 兒玉五右衛門左
- 兒玉勘左衛門左
- 三井七郎左衛門左

船究衆

- 長沼又左衛門左
- 松田久兵衛左
- 末國八郎左衛門左
- 檜崎三右衛門左

兒玉庄左衛門左
 佐波庄右衛門左
 深津七兵衛左
 國司助左衛門左
 米原六右衛門左
 飯田七兵衛左
 兒玉半兵衛左

船宛衆え之猶々書

尙々此中に買取候分たどへ船に積置候共差留被置先々え戻候様可被申付候以
 上

十二月二十九日江戸火災以後櫻田邸工事ニ關シ營繕方役員及材木國許ヨリ運輸大
 工出府且諸大名作事探索ノ内容江戸老臣ヨリ通牒ニ付キ當役ヨリ回報左ノ如シ
 十二月二日追て之御狀拜見仕候共元上御屋敷御普請材木之儀御臺所道具は先日

得御意候分に無殘津出相調改候て早々船積申付差廻候迄に御座候然は秋田草楨
 石見曾木をしきはんだ分に入可申候間北國并石州えの聞合可申付之由得其意則
 沙汰申付儀候最前は御色代小書院御臺所御料理之間立にて御外は自然に被仰付
 可然と御召候處に今度井伊立蕃殿松平丹波殿伊達大膳様御事御家督に付右御三
 人衆此中御老中被成御振廻候就夫様子御聞合伊達様之は御家をも大形に及御覽
 候所何分手廣御普請にて太躰御馳走之ふり其以前に相易儀無之候故中々此中
 思召候様成事にては御老中御振舞相調儀にて無御座候間御書院御座之間無之候
 ては不相澄付て方々の御差圖を御取集御覽被合之由御尤存候去比松伊豆守殿え
 御用にて御出御留守に付此比出來之書院廻り小書院迄御覽候處御身躰には手廣
 き御普請に御座候由何も御大名衆之御普請右之分に御座候時は殿様御上屋敷之
 儀も御表廻り之儀は御作事被仰付候はて不相成儀と於此地も存候此脇上御屋敷
 御差圖大かた御かため候て彌木積被仰付御色代御書院材木をはそろくと可被
 成御買せ候由御尤存候其外之御家をは丈夫にさへ有之候はふし木にても尤つ

か松木之丸木柱にてもとり合相調候様にと御沙汰之由無御余儀候御老中被仰請候時は四十人計も御案内之儀候故御書院も廣く入申其外御勝手之御一門様え之御料理常々御勝手衆え之御料理役者え御食被遣候所旁大段之事候故間敷廣く入候儀は去比上御屋敷御普請被仰付候表向之分候御廣間を除跡は不殘入申様に候條何と危相に被仰付候共大分御造佐入可申と御思召之通左様可有御座と存候此節諸大名衆多分御普請被仰付之由候條彌物每高直に可有御座候間一入御物入之儀と存候御材木積等被仰付於其表御造佐入の物をは爰元え可被仰越之由得其意候併はやゝ間無之儀候條爰元にて材木取此以後申付差廻申儀などは最早間にあひ中間敷と存候

一去比御御拜領之御大名衆之内御老中え御案内被仰入候御方しはゞ御座候由候加賀守殿之儀は實正被問召候其外之儀は疋々無御存之由然とも此度之儀は左馬様右馬様其外は御家督之衆計え被成御座殘へは無御出之由候併來年よりは大火事以後三年過扱又此後若君様など被遊御誕生候はゞ彼是以其以前之様

に御大名衆えも可被成御出哉との取沙汰にて御面々其御用意と相聞申之由左様可有御座と存候

一來年四月には上様日光御社参との儀先月十七日に被仰出にて諸御大名衆も御悦に被成御登城候傳之御城持衆へも被仰渡城之御取繕御普請之由候道爲御見合高木伊勢守殿荒木十左衛門殿近日御越にて候御供も尾張様水戸様井伊玄蕃殿松平右京殿水野出羽殿監物殿堀田上野殿其外數人度々に被仰渡候御老中えは豊後殿美濃殿御供之様に取沙汰有之候左候て一兩年之内は御上洛も可有之様に下之取沙汰仕候由彌左様も候はゞ御大名衆御物入何角以可爲非大形儀と於此地も存候

一此節も世間御振舞事はやり殿様へも此度は節々御振廻有之候其以前之江戸よりも此比は方々と御付あひ多能拍子にて役者一圓手透無之様子に御座候由こなたえもいよゝ御振廻事打續可申様思召候去三日にも森内記殿被仰入四日には永井日向殿あなたより可被成御見廻との儀平野權平殿を以被仰兼てより

之御約束にて其外歴々被仰入御馳走に北十太夫など被召寄候年内より來春か
け御案内被仰候御方數多之儀御座候由何篇貴様など御心遣推察仕候此中節々
被仰聞候鶴之儀追々差送り申候先年得御意候様に諸那え大鳥討付置無緩申付
候間討候て差出次第御仕送可仕候此段は先日御報に得御意候間不具候恐惶謹
言

十二月二十九日

堅 安 房 格

榎 遠 江

毛利十一代史卷之八

大田報助編次

泰巖公記八

萬治三年庚子正月元日公江戸ニ在リ歳首ノ儀例ノ如シ

二日公登營將軍ニ謁ス又吳服一重ヲ賜フ例ノ如シ

十二日家臣毛利宮内證人弟毛利一郎兵衛ヲ宮内養子右衛門男伊織ニ交換セント聞
老へ申請セラレシニ弟ヲ孫ニ替ルハ許可セラレストナリ

十四日湯島天神門前發火小網町箱崎町ニ至ル人家二千三百五十軒燒亡死スル者七
十餘人コレヲ本所回向院ニ埋ム後例トナス是時公増上寺へ出馬セラル公先登出馬ノコ
トヲ監察土岐十左衛門ヨリ大城へ報告セリ

二月朔日萩地ニ於テ喧嘩其外異變ノトキ諸口搦番ノ次第當役中ヨリ組頭へ對シ條
書左ノ如シ

一鶴江口

益田 隼 人組

但加河津道わかれ

一松本口

佐世九郎 左衛門組

但市はつれ

一龍藏寺掛口

井原與三 左衛門組

一霧口ノ掛口

粟屋 帶 刀組

一大屋坂口

阿曾沼 太郎 左衛門組

一櫻江渡り上り

柳澤 新右衛門組

一玉江渡り上り

山内 九郎 兵衛組

以上

一太抵請取口如此候條其方角之分は克々氣を付請口之方よりぬかし不申様に搦之衆え可被仰渡事

一壹ヶ所え五六人宛但此内馬に乗道具を持せ候通之衆を二三人宛組合を可被差

出候左候而内より外え出候者之分は一圓通シ中間敷候

公儀御用之儀には遠江手形を出可申候條其辻を以通可被申事

一自然及數日に候は到其時頭々より相印を取揃搦所え可差出候間其辻を以手形無紛者は可有勘過事

一不慮之儀有之時は聞付次第此方よりの觸を不待即刻請取口え罷出候様に可有御仕與置事

一御番所之儀は一日宛にても或半日宛なりとも校量次第可有御替事

一江戸御番手上り候組之跡えは前年御番手調下候組次第に入替り候様に可有御仕與事

一渡り有之所夜中搦被差出ため遠江より渡手形を預ヶ置可申候若不入年は毎年壹ヶ年切に右之手形可被差返候左候は又調替候て預ヶ置可申事

一御城當番之組も先非番之衆を可被差出候搦久敷入儀に候は其節物頭衆替可申事

一其組え之御使番衆馬上にて搦所え罷出様子承合其趣各え申出候様に可被仰渡
事

以上

右之辻を以自今以後不慮之儀有之時は即刻搦之衆出様に可有御仕與候己上

萬治三

二月朔日

板	益	毛	毛
遠	越	隱	宮
江	中	岐	内

山内九郎兵衛左

井原與三左衛門左

益田隼人左

柳澤新右衛門左

阿曾沼太郎左衛門左

佐世九郎左衛門左

粟屋帶刀左

清水長左衛門左

益田孫左衛門左

五日日光社參延引ノ事ヲ令ス府下シバ火災アリテ人心安カラサルヲ以テ下民
困難スルヲ憫レムナリ

九日武家ノ屋敷ニ町人住居スルコトヲ禁ス徳川史 五代史十

十日毛利日向守領内ナラシ檢地執行セラレ高千石ニツキ百七拾石宛石高増額セリ
大記錄卷十四萬治三年二月江戸當役堅田房州ヨリ御國當役榎本道州へ毛利日向守
様御領分ならし檢地被仰付之由御國ヨリ江戸へ被申上セ候返事ニ載ス徳山系譜萬
治三年庚子領内檢地改知行高五
萬五千四百九十九石四斗二合也

十五日陸士北山半太夫逃亡セシヲ捕縛セラル前町龍泉寺ニ於テ切腹ヲ命セラル

三月朔日萩城代穴戸丹後附屬佐藤又右衛門辭職ヲ請フ林一郎右衛門ヲシテ之ニ代

ラシム堀三左衛門跡職實子三之介ニ命ス一郎右衛門生前請願且數年勤勉シタルヲ以テ幼弱ノ間知行六十石之内四十石ヲ賜ヒ大組ニ加ヘ廿石沒收少知行持財滿仁左衛門跡職生前允許ノ如ク養子庄兵衛十八歳ニ至ルヲ以テ知行拾參石ヲ賜ハル同日大手三ツノ御門往來ノ件ニツキ當役中ヨリ御目付中へ拾壹條ノ奉文ヲ授ク其文左ノ如シ

箇條

- 一 晩之六ツ時より朝の六ツ時迄御門をたて夜中之儀は不依男女手形にて往還可申付事付荷物右同前之事
- 一手形之儀前々より御門へ出し置候夫々之相印に引合於無紛は往還可申付候左候て取置候手形は翌日悉頭衆え渡可申事
- 一 内藏助様御家來衆之儀は彼御家老衆以手形合印に引合通可申事
- 一 御家人諸侍之外醫者針立町人百姓其外自分ノ之合印無之もの之儀は其頭々より出置候相印手形を以往還可申付事
- 一 此中御門え相印出し置候者之内何とぞ様子にて印判を改候は其頭より對旁無紛通墨付可被取置事

一夜中に手形無持參申掠族又は手形有之とも紛たる子細於有之は御門番所え懸留置早速様子可申出候自然否申もの有之は依其品搦置候ても不苦候若究緩せ有之は御門番之者共可爲越度事

一 長府徳山岩國より之飛脚夜中に參懸り候は番衆之内一人案内仕其先々え可送届事
一 御門明たて之儀は定番之もの可仕候自然一人にて不成事有之時は加番之者相加明たて可仕事

一 堀うち堀外によらず火事有之時は火消番衆かけ付申等候間御門ひらき候て通可申事

一 走者或喧嘩其外不慮之儀候て相手不知歟又は其趣不極内は晝夜共御門之往來如前々先一圓に可差留候尤不慮之儀有之時は諸士其組頭え集居候得と内々之被仰渡候條面々之與頭え參候衆御門迄可罷出候へとも其衆をも先差留置自然

多人数御門えつかへ候は、至其時旁より様子可被申出候左候は其事之品により校了候て出入可申付事

一右之様成儀候時御門往來差留候ても御在國之時召候て罷出候衆其外御用にて罷出候御手廻り衆御小性衆之儀は通し可申事

付搦に出候衆之儀は通し可申事

付方々より注進之ため通候もの并聞合旁々差出候もの儀は其趣聞届可有

勘過事

付請取之御番所有之もの其外惣て御用にかゝり候御役人之儀は其理聞届無

子細候は通可申事

付此外にも何とぞ不叶子細有之もの之儀は至其時旁校了を以出入可被申付事

以上

右之辻を以大手三ツ之御門往來可申付通旁組之者并定番之ものへも可被申渡候以上

萬治三年

三月朔日

椋	益	毛	毛
遠	越	宮	内
江	中		

赤戸四郎五郎左

桂二郎右衛門左

岡部半左衛門左

國司太郎左衛門左

和智源兵衛左

十日公歸國後江戸留守居赤戸民部ニ出府ヲ命セラル

十八日毛利丹波屋敷裏向ヨリ發火主殿助部屋迄燒失西風ニテ萩城天樹院大木屋上使屋ハ風上ナリ風ノ方向變シ戌亥風トナリ金子彌右衛門宅へ燃移リ兒玉十兵衛宅

迄燒亡セリ

二十四日京都若君竹子姫出乳人雇用三人扶持切米拾五石ヲ給セラル武家ヨリ公家

へ縁職ノ例ニ因ルトナリ又乳持一人へ二人扶持米八石ヲ給ス

二拾九日證人毛利吉十郎代リトシテ毛利主殿出府本日登營吉十郎賜暇歸國ノ命ア

リ

四月五日桂長兵衛跡職實子彌左衛門ニ命ス

同日將軍稻葉美濃守ヲ使トシ公ニ就封ノ暇ヲ賜フ賜品式禮總テ前年ノ如シ

六日公登營謁見馬ヲ賜フ松平出羽守同伴ナリ此時間老ヨリ傳命左ノ如シ

一今度御歸國之上利支丹宗門彌無怠斷究可被仰付事

一去年御參勤之儀諸大名衆三月中に江戸御着候故道中込相宿に迷惑仕候由候來

年は先年如被仰出候四月中に可有御參府事

八日關老阿部豐後守ヨリ賜馬ヲ贈ル使者深澤伊兵衛へ裕二ヲ賜フ又諏訪部彦兵衛

へ裕三ヲ賜フ彦兵衛職名
詳ナラヌ

十八日公歸國ノトキ萩地其他待迎ノ件江戸老臣ヨリ國許老臣へノ報告書ニ載ス

綱廣公御一
代之記下

二十二日公發途ニ先チ關老へ稟議書左ノ如シ

松平大膳大夫申上覺書

一私儀今度京都へ通り掛りに立寄申度奉存候去年も奉得上意立寄申候今度も奉

伺段用拾多奉存候得共當春鷹司殿に若子誕生にて候間立寄見參仕度奉存候苦

間敷儀に御座候は、被成御伺候て被下候は、忝奉存候事

一増上寺火之御番去當年只今迄致所勤候御暇被下罷上候條右之御役被召上候様

にと存奉伺候事

一當御地罷上候儀松平出羽守むすめ祝言相調互之祝儀之節居合申度奉存候に付

致延引候事

卯月二十二日

二十五日福原三郎右衛門江戸御留守御目付暫役ヲ命セラル

二十八日毛利刑部少輔元知參觀將軍へ謁見徳川實記

二十九日關老阿部豊後守飯田平右衛門ヲ召シ傳命左ノ如シ

一先日書付ヲ以テ被仰越候儀達上聞候當春應司殿若子誕生に付京都立寄對顏有度之通被聞召上候京都可被立寄之旨被仰出候

一増上寺火之番之儀御暇被遣候上は無別條事に候彌可被成御赦免之通被仰出候事

一豊後殿御心得を以平右衛門へ御尋候は大膳殿御立彌來月二日にて候哉と被仰候

平右衛門申候は二日に可罷立覺悟に御坐候併松平大和殿祝言相調双方之祝儀は松平飛騨殿御死去に付及延引候此祝儀相調候迄は罷居度可被存候併只今迄は彌二日に可罷立と被申候由申上候へは豊後殿被仰候は大和殿祝言は相調候

へ共双方之振舞延引之由候於然は大膳殿御立も被指延双方之祝儀相調御立被

成苦間敷之通被仰聞候事松平出羽守ハ龍昌夫人ノ弟ナリ松平大和殿祝言トハ出羽守ノ息女ヲ大和守ニ嫁嫁スルヲ謂ナルヘシ

十一日公江戸ヲ發ス

五月二日江戸發途ヲ決シタレトモ此頃松平出羽守ノ息女松平大和守へ婚嫁ア

リ式畢テ親姻ノ各家集會ノ祝式アリシニヨリ日期延ハセテ本日ノ出發トナリタルナリ

二十四日公京都ニ至リ鷹司家ヲ訪問ス

二十六日公京都ヲ發シ二十七日大阪ニ抵ル

二十九日公大阪御乗船

六月七日公三田尻御着

九日公三田尻ヲ發シ山口ニ至ル

十一日公城ニ入り對面ノ間ニ出座シ熨斗昆布出三献ヲ侑メ膳ニ就ク

毛利宮内毛利隱岐益田越中榎本遠江ヲシテ伴食セシム又賜暇謝恩使トシテ兒玉圖書ヲ出府セシム

十六日諸臣登城御歸城ヲ祝ス公御奥ニ於テ老中御手廻頭嫡子御手廻組大廣間ニ出テ

一門へ謁ヲ賜リ宴ヲ張リ酒ヲ置ク又諸臣順次謁見御禮代八朔ノ例ノ如シ

十八日大阪ニテ雷震青屋口火藥庫二萬千九百八十五貫目鉛玉四十三萬千七十九燒

ク加番小屋悉崩潰死傷多シ

同日吉川内藏助同監物登城御歸城ヲ祝ス

二十五日賜暇謝恩使兒玉圖書去ル二十三日參府將軍へ二種一荷羅紗五間ヲ進獻セラル

二十六日毛利日向守就隆息女千福岡部美濃守三男主税ト婚儀ヲ修ム

二十七日公大廣間ニ出テ寺院ニ謁ヲ賜フ杯酒モ亦例ノ如シ

八月朔日公入國ニツキ家臣宅へ臨訪ノトキ饗膳并伴食人員隨從人及酒飯ノ制限ヲ定メ當役中ヨリ御目中へ當ル條書アリ略ス大記録卷二

六日祖式權平赤川半兵衛養子又六離縁ニテ萩退去ノトキ追窮シテ殺害ス審問ノ後權平ニ切腹ヲ命ス事由不詳

二十三日幕府酒造石ニ關シ傳令アリ萬治元年閏十二月三日令スル所ト粗同一ナルヲ以テ略ス大記録卷廿四

九月五日供陸矢部郷右衛門畔柳十左衛門國府神太夫ニ國退ヲ命ス事故ナキニ御中

間之宿所へ投シ拔刀暴行ノ科ニ依テナリ

十四日公親ヲ大書院ニ出テ一門組頭中寄組ヲ召シ撰定三十三條ノ法憲ヲ頒告セラ
ル初ハ宍戸土佐、毛利伯耆、毛利丹波、毛利宮内、益田越中、福原左近、老中五人列席ナリ後
席ハ組頭井原與三左衛門、益田隼人、佐世與三左衛門、柳澤新右衛門、阿曾沼太郎左衛門
栗屋帶刀、山内九郎兵衛清水長左衛門、日野左近、御船手組頭浦孫兵衛、村上掃部、村上一
格、寄組楢杜隼人、熊谷主計、宍道五郎兵衛國司與三兵衛、梨羽求馬、兒玉圖書、宍戸求馬、ナ
リ是時右筆土方傳右衛門八木甚兵衛原田甚右衛門等公ノ前ニ進テ之ヲ誦讀ス右畢
リ公洞春寺ニ詣シ右筆ヲシテ法憲ヲ讀誦セシム爾來毎年正月十一日此日藩府城中
ニ於テ此令條ヲ朗讀シ家老中ヲ始メ諸有司ヲシテ之ヲ聽カシム郡地ニテハ代官
ナリ招集シ郡中制法ヲ朗讀シ町奉行ハ町中ノ父此時本令へ細目二十八項ヲ副シ頒達
セリ其標目左ノ如シ本令并細目共長文ナ

第一憲法三十三箇條

第二御一門

第三評定場

第四目附

第五寺社方

第六物頭

第七中間頭

第八町方

第九郡中

第十衣裳

第十一宴會

第十二諸法度

第十三捕籠者

第十四搦捕

第十五火消

第十六屋鋪方

第十七繪師

第十八人沙汰

第十九出津

第二十所務

第二十一給領所務代

第二十二山屋鋪

第二十三總門

第二十四公臨行之時獻饗定

第二十五同時陪席之人

第二十六公膳ヲ供スル時
扈人へ贈物ノ定

第二十七組頭伺物

第二十八寺社方伺物

第二十九目付伺物

按ニ萬治三年藩祖元就公以來ノ遺法ヲ祖述シ藩法三十三條ヲ編シ題シテ當家制
 法ト曰ビ長ク毛利氏ノ式目トス後世之通稱シテ萬治制法ト曰フ其他町方制法郡
 中制法ノ如キ皆時ヲ同クシテ成ル此他猶多ク令條ヲ制定ス藩政ノ綱領ヨリ士卒
 ノ風紀吏員ノ規律民治ノ体要ニ至ルマテ皆此中ニ網羅概括セサルナシ蓋シ毛利
 氏二百餘年ノ制度典例ハ大要是時ヲ以テ備ハル大照公建國草創ノ際政制未洽寛
 永九年始テ令ヲ發シ制ヲ建ツ泰巖公幼齒世ヲ承ケ先公ノ遺臣忠良ト稱スルモノ
 毛利宮内益田越中堅田安房相杜兵庫兒玉淡路國司備後板本遠江等へ政務ヲ委任
 セラレ土方傳兵衛等稍學識アル吏員ヲ撰ハレ歷世ノ遺典ヲ斟酌シテ夙ク後代ノ
 型法ヲ建ラレタリ故老ノ口碑ニ公性英邁剛直頗ル有爲ノ資アリト信ニ然リ是時
公年
 二十

口不詳吉川内藏助へ三十三條ヲ頒布ス

十六日公大書院ニ出座シ組頭寄組三田尻三組頭公儀役兩人ヲ饗シ膳ヲ賜フ萬治元
 年御入城ノトキ多事ヲ以テ稽緩此ニ至レリ十八日御手廻ヲ召シ膳ヲ賜フ毛利主膳

毛利隠岐伴食ス

廿八日大組并御藏元付少知行持惣無給同廿九日大組并御徒士御陣付三十人ニ膳ヲ賜フ兩日共公大廣間ニ出座シ散樂ヲ張り諸臣ヲシテ觀覽セシム

十月朔日萩城御式臺ニ帳簿ヲ設ケ諸臣賜食ノ謝禮ヲ受ク

三日本日ヨリ萬治四年三月迄ノ間佐世九郎左衛門外十一人ノ宅へ公入國初テ臨訪各家膳具ヲ侷ム

六日今回制法發布ニ依リ寺社奉行井上五郎兵衛日野左近ヨリ當役毛利主膳外四名へ伺書ヲ提出シ當役ヨリ肩書指令左ノ如シ

伺物覺書

此段本書之分ニ候事

一出家衆之衣類ハ各別ニテ可有御座哉之事此段彌被仰出之辻に可被相心得候雖然他國より限有外客にて自然難叶候候は、其節斷可被申出候依其品可被指免事付限有兩方之小姓一兩人にはひの袖之類可被指免哉之事

此段不苦候事

一限有社人祈禱仕候時裝束着候時は絹布可被指免哉之事

此段右同前之事

一常々面々下着は此中のごとく古小袖可被指免哉之事

此段下差ニハ不苦候事

一女衣類此中持來候古小袖は何にても苦間敷哉之事

此段限有之時長袴之衆えのしめ被指免時は可爲各別候其外はたごひ裝束にても御定之衣裳たるへき事

一官位有之醫師繪師袴着仕候時は絹布可被指免哉之事

此段不苦候事

一役者之儀は限有雖有之時は絹布可被指免哉之事

此段本書之分ニ候事

一寺方佛事之時は二汁三菜香物は外但膳にすへ付二の汁は引汁と御ケ條に相見

へ申候於御位牌所に御作膳被仰付候時は可爲各別哉と奉存候或は御設月或御施餽鬼執行之時は常々佛事同前に可被仰付哉之事

此段出家は本書之分不苦候事

付酒一返之時は汁椀迄は可被指免哉之事

此段本書之分に可被申付候事

一冬至師弟悦之儀式常々振舞同前に可被仰付候哉酒三返にて盃は給あひ可被申哉之事

此段親子夫婦兄弟之寺は不及沙汰に此外之親類縁者にても子細候て位牌立置候者之分は檀那之沙汰たるへき事

一勸進奉加之儀師檀之間は不苦之通御ケ條に相見へ申候二親子共之位牌寺は檀那にて可有御座候兄弟伯父叔母之位牌寺へも常々參詣仕候へは檀那之様に御座候此物切如何可被仰付哉之事

此段御音信下折之儀は木具可爲無用事

一如何躰之儀式たりとも木具一切停止と御ケ條に相見へ申候御城え指上申候御

音信物之下折杉箱等は如何可有御座哉之事

此段不苦候事

付祝言之時樽肴之下折并十帖之下折等は如何可有御座哉之事

此段右同前之事

付寺社方より年頭歳暮に札守すへ申候下折并菓子納豆之類入申候小箱類等は

如何可有御座哉之事

此段無用たるへき事

一眞宗坊主遺女暮にて同宗之寺に使に遣候事可被指免哉之事

此段右同前之事

一總て寺方に老母歳寄之女子兄弟抱置候事可被指免哉之事

此段江湖付候寺之儀は二季ともに何月より何月迄と月切被相定其間に江湖僧來去仕分は其寺々の手形にて可被指免候其外之儀は御所務代之手形を取候やうに

可被申渡事

一寺社家共に他國え罷出候時は寺社奉行え訴へ罷出候へと御ケ條に相見へ申候
 在々之當社家は爰元え不及罷出所々之那代え申達筈に右の御肩書物に有之候
 此段申渡候處に大寧寺龍文寺瑠璃光寺御理被申候は一年に兩度之江湖執行仕
 候付て數多之人數にて御座候條此中のごとく手前々々よりの手形を以勘返被
 仰付候やうに御断申上度之通候如何可被仰付候哉泰雲寺鯖山禪昌寺も同前に
 て可有御座候事

此段三間梁より上之儀は時々理申出請指圖候様に可被申渡候たとひ三間梁たり
 といふとも結構之普請停止之事

一家作事分際相應に仕候様にと御ケ條に相見へ申候寺方作事之儀者各別にて可
 有御座哉之事

此段御目付衆え申渡置候條彼衆え沙汰可被仕事
 一祭典之事五十以上之ものは伺候上可被成御免之通御ケ條に相見へ申候或官位

有之醫師畫師は五十之内にても自分之乗物にて候は、可被指免候哉身體宜候
 ても伺申事にて可有御座哉之事

此段右同前之事

付急病人之有時御目付衆え申出候は、遅々仕病人及難儀事可有御座候條被指
 免其日中に罷候様に可被仰付哉之事

此段自然有合候は、苦間敷候事
 一不時之振舞之時濃茶苦間敷哉之事

以上

萬治三年十月六日

野左近

井上五郎兵衛

毛主膳及

毛隠岐及

益孫左衛門及

堅 安 房及
榎 遠 江及

右付書共に二十壹ヶ條肩書之辻を以沙汰可被仕候以上

同日

榎 遠 江
堅 安 房
益 孫左衛門
毛 隱 岐
毛 主 膳

十一日今回三拾三條發布ニ依リ八組頭井原與三左衛門外八名ヨリ當役毛利主膳外四名ニ就キ伺書ヲ提出ス當役中ヨリ肩書指令左ノ如シ

伺申付立之事

此段御ヶ條之辻に候間自今以前之儀は取次被申間敷候乍去養子隠居之御理は可爲各別事

一 不論善惡邪正自今以前之訴訟堅停止之旨被仰出候然は去々年御在國之節差出候書物御事多に付御沙汰不被爲成候間先被差返與候て去冬被成御戻候就夫組中より書物各迄差出被置候書物之分は臺通可被達上聞哉之事
此段覺番衆之儀は不及沙汰搦所へ出候衆も殿様御在國之時は御城罷出趣可被申上事

一 不慮之儀有之時御使番衆馬上にて搦所え罷出様子承合其趣各様え申上候様可申渡之由被仰出候御城當番之時はいかゝ可仕哉之事

此段代役之儀時々從公儀御校了を以被召仕候節は諸役各可爲同前事

一 病者之儀貳年迄は諸役目常之者可爲同前貳年過ル時は其身上相當之役常に倍へき之旨被仰出候然處相煩御役目所勤不相成代役なと被仰付候者之儀は御役目常之もの同前可被仰付哉之事

此段近年之煩貳年に過候者之儀は來朔日より身上一倍之御役可被申付二年に不足之者之儀は以前に煩付候時之年月被相究此後貳年に過候時より一倍之御役目

可被申付候然間右兩條共に煩付候時之年月銘々組切に急度可被付出候事

付近年相煩罷居候者諸役來朔より之沙汰に可仕哉之事

此段乗物同前之事

一小身之醫者町醫者等之事は歩行達者成内は夜白共に徘徊して療治可仕通被
仰出候左様御座候時は急病人有之迄にても醫者之所え迎馬も遣中間敷哉之

事

此段諸士之分はひろうとの袴袖不苦候らしや之儀は可為無用候但足輕以下は右
之類一切停止之事

一不依高下羽織差物袴袖漢和共に高直之もの一圓停止之旨被仰出候左候時は
ひろうとらしや之袴袖停止に可被仰付哉之事

此段病人帳に付候もの之外は不及沙汰候事

一尺にもたらぬ小馬乗候儀幼少六十以上之老人或病人は不苦之由被仰出候久
敷相煩病人帳にも付候程之者之儀にて御座候哉左候にも病人無紛候は、可

被成御免哉之事

此段八拾石以下在郷居懸り御赦免之衆は各別に候間組切に付立可被指出候左候
は、御目付衆え渡置可申候事

一雖為御兩國之内御城下をはなれ一宿仕候は、組頭え達其上御留守居え可申達
之由被仰出候八拾石以下此中在郷御免にて罷居候もの之儀は各別に可有御座
哉之事

此段不苦候事

一持合候古小袖下には着可仕哉之事

此段本書之分に可被申付事

一又内羽織御差免被成候もの之女衣裳局一兩人之衣裳同前にて可有御座哉之
事

此段下着には不苦候事

一女之衣裳持合候古小袖之内に自然只今被成御定候直段分際不相應之様に相見

候とも持懸り古小袖之儀は可被成御免哉之事

右今度御ケ條之内伺申度儀書立差出候條御肩書被成候は、其辻を以沙汰可仕候
以上

萬治三

十月十一日

- 山田九郎兵衛
- 柳澤新右衛門
- 益田隼人
- 粟屋帶刀
- 佐世九郎左衛門
- 阿曾沼太郎左衛門
- 清水長左衛門
- 井原與三左衛門

毛主膳格

- 毛 隠岐格
- 益 孫左衛門格
- 堅 安房格
- 板 遠江格

裏書に

右附書共拾壹箇條肩書之辻を以沙汰可被仕候以上

同日

- 板 遠江
- 堅 安房
- 益 孫左衛門
- 毛 隠岐
- 毛 主膳

二十一日唐僧隱元ノ弟子木庵長崎ヨリ攝州富田ニ赴ク人馬遞送ノ件當職板本遠江
ヨリ村上太左衛門へ回答書アリ隱元ハ承應三年末初セシナ
二十四日御目付飯田六郎兵衛外四名ヨリ當役毛利主膳外四名ニ付キ伺書ヲ提出ス

當役中ヨリ肩書指令左ノ如シ

此段理被開届内え入可被申候雖然依事亭主内え入候て者不可然儀も可有之候左様之時者旁并搦之物頭衆惣談之上何分にも能様に可有差圖事

一喧嘩口論仕亂取罷罷居候時其家之亭主其節出違右之様子聞付罷歸候て内へ入可申と申候は、如何可仕哉之事

此段右同前之事

付其家之下人は又他所にて様子承罷歸内え入可申と申理候は、如何可仕哉之事

此段右同前之事

付自然他所え罷出候留守に一家之者共口論仕亂罷居候時主人聞懸罷歸候て内え入可申と申理候は、如何可仕哉之事

此段本書之分に可被仕候御定之役人之内遠方に居候歟何とぞ依品若不出合衆候て一同に同道不相成時者其場出合候衆計先可被罷出候左様之時自然被待合候は

訴可爲遅々候左候て殘仁も追て出其子細可被申事

一不依何事不慮之儀有之て其事落着之上様子申上候時は其場へ罷出候御定之役人不殘一同に罷出可申上哉之事

此段火事場より二三町引退立置せ可被申事

一火事有之時諸士乗馬置所如何可被仰付哉之事

此段火事之時者各間も罷出儀に候されとも其場え馬を乗込候は、火消之者共かせきの隙に可相成候條可成程は歩行にて下知可申付候尤歩行難叶所にては馬上にても見合可申候旁も左様可被相心得候其外喧嘩口論不慮之儀有之時は相定之役人之外其所え不出合筈候間指違人込之儀も有之間敷候事

付御目付役之者共火事其外人込之所にては馬上にて見廻可申候間此段兼て被途間召可被下候事

此段不苦候事

一諸出家衣類之儀何にても可被差免哉之事

此段限有之時長袴之衆え熨斗目被差免時は可爲各別候其外は縦令裝束にても御定之可爲衣裳事

一法橋法眼裝束之時は衣裳可爲各別哉之事

此段熨斗目之儀者時々御校了候て可被差免候常々は縦長袴着候共御定之可爲衣裳事

一諸士長袴着之時は熨斗目其外絹布可被差免哉之事

此段前髪有之御小性衆之分者絹布不苦候事

一前髪有之御小性衆衣裳何にても可被差免哉之事

右御肩書被成被下候は、以其辻其沙汰可仕候以上

萬治三子
十月二十四日

長井治部右衛門
木梨喜左衛門
福原又兵衛

西山六左衛門
飯田六郎兵衛

毛 主 膳 及
毛 隠 岐 及
益 孫左衛門 及
堅 安 房 及
榎 遠 江 及

右付書共拾ヶ條肩書之辻を以沙汰可被仕候以上

同日

榎 遠 江
堅 安 房
益 孫左衛門
毛 隠 岐
毛 主 膳

十一月七日御目付福原又兵衛外四名ヨリ當役毛利主膳外四名ニ即キ付書共拾三條
伺書ヲ提出ス當役中ヨリ肩書指令左ノ如シ

此段惣領壹人は亭主可爲同前縦二男三男とても拾五歳より上は拾人之内に沙汰
可有之事

一御成之時勝手に相詰候人之數拾人之外縦子孫兄弟とても歳拾五過候は、御法
度と被仰出候併常々家内に育置候者は可被差免哉雖然御扶持被下置もの、儀
は可爲各別哉之事

此段可被差免候事

付り初而御膳被差上候衆或家督被仰付衆限有之而御膳被差上候時は御臺所頭
又は御膳夫衆御陣僧衆御雜色御食燒え祝儀之禮物從先年有之由候自今以後
も可被差免哉之事

此段本書之分に可被差免候事

一禮錢香奠音信之贈答近き親類縁者忌懸ると御座候時は其一家の内子孫兄弟

に忌懸る間之儀たるへし然は聲小しうと兄弟聲或叔母聲姪聲或孫聲いどこ
むこ又行合兄弟相あけ相聲養子之親等は縦雖爲古縁者可被差免哉此外女方
忌懸る間是又同前たるへき哉の事

此段忌かゝるもの可爲同前候事

付忌不掛親類之内に又おち又おはかやうの類は各別にて御座候いどこよりは
ちなみふかく御座候如何可有之哉之事

此段寄親は契約親可爲同前事

付契約親被差免上は寄親之儀も可爲同前哉之事

此段病人爲保養於所望は苦間數候事

付病人好食物或藥喰之物は爲保養候間縦雖爲他人於所望は取遣苦間敷哉之事
此段於申出は可被差免候縦町醫者又内醫者たりといふとも依品可被差免候事

一乘輿之事醫者針立等之類は御免許之上可乘輿身躰宜醫者安に病家之駕を請
事狼籍之至と被仰出候併御家人醫者針立等之儀は不依老若大小身自分之駕

においては可被差免哉之事

此段申出上於無紛は病家之乗物可被差免候事

付馬持通之醫者針立等之儀は病家之駕を請事停止之段被仰出上は不及沙汰其

外小身之御家人醫者針立等其身大老或かたはもの之儀は前廉御理申上御僉

議之上於道理者縦町醫者又内醫者同針立病家之駕を可被差免哉之事

此段乗物可爲同前候事

付馬可爲同前哉之事

此段急病人於無紛は訴之儀其日中翌日迄も可爲被差免候追而實否之沙汰有之事

付小身之醫者町醫者等へは急病人有之時病家より乗物遣候て其節御目付え訴

可申之通に御座候然とも小身之衆は兩方え之手遣難叶可有御座候條其日之

中に訴候は、可被差免哉之事

此段御紋之帷子は苦間敷候事

一諸士衣裳之儀御定之外は縦拜領之雖爲吳服着仕間敷旨被仰出候然共拜領御紋

之帷子は可被差免哉之事

此段町醫者同前に可被差免候事

付又内之醫者針立繪書等其外法舩之者衣類之儀は町醫者可爲同前哉之事

此段被相究本書之分に可有其沙汰候事

付醫者針立繪書馬乘其外諸藝之弟子として或は士之二男三男或牢人者等抱置

候もの衣裳諸士可爲同前然ときは前廉其筋目假名書付御目付中え差出候様

に可被仰付候哉乍去家人同前に出行之時供など申付候は、又内可爲同前哉

之事

右付り書共に拾三ヶ條御肩書被成被下候は、其辻を以沙汰可仕候以上

萬治三

十一月七日

飯田六郎兵衛

長井治部右衛門

木梨喜左衛門

西山六左衛門

福原又兵衛

毛 主 膳 及

毛 隠 岐 及

益 孫左衛門 及

堅 安 房 及

榎 遠 江 及

右付り書共に拾三ヶ條肩書之辻を以汰沙可被仕候以上

同日

榎 遠 江

堅 安 房

益 孫左衛門

毛 隠 岐

毛 主 膳

二十八日はヨリ先キ正保三年ノ頃國計窮困ヲ以テ家來中領地俸祿トモ二分方減省

シテ内庫ノ不足ヲ補フ方法ヲ建ラレシニ今回特旨ヲ以テ是ヲ還附シテ従前ノ額ニ戻サルヘキ旨ヲ家來中へ頒告セラル又家來中ヨリ還附ノ等級方法等條數ヲ以テ布達其文左ノ如シ明正沙汰書アリ奉行見玉傳右衛門等三人ヘシ

先年之步上リ今度被返遣付而被仰出條々

一從御先代就御逼迫正保三ノ暮諸事御改被仰付御家來持懸リ之内貳步通り被召上之由被聞召上候至只今も御借銀大段有之との儀候へ共先年之悪年以來御家來之面々一入逼迫仕身躰難續者多く有之様に被聞召上候御家來衆之儀は數代御奉公申上たる筋目之者に候故御不便に被思召候條何とぞ公儀向さへ御相應に於相調は御内證之儀は御堪忍をも被遊二步被返遣度被思召之旨重疊被仰出候定以有難次第に候條面々可被得其意事

一御所帶方目論見被仰付被遊上覽候處步上リ被返遣候時は年々之御道方大段不足に相成儀候へ共迎被返遣儀候條先年御改之節被召上候二步三步一步通り迄不殘可被返遣之旨被仰出候事

付歩上り下地にて差上候分は今度も下地可被返遣候浮米を以差上分者浮米にて可被戻遣事

付先年御改之節人により持懸半分三步二も被召上たる者有之と相聞候加様に並をはつれ被召上候儀は其節御吟味有之候而之儀たるへきと被思召候然間今度歩戻被仰付には及間敷候得共御心入を以只今之持懸に二步或壹步可被返遣之旨候事

付御改時分跡目被立遣候衆之内其親々何そ子細有之衆又は其人により親之持懸り之内いか程可被立遣と御校了を以被仰出候衆有之候右之類之衆手前之儀は被仰出候右辻に歩上り不被仰付候故此度も歩戻之不及御沙汰候事

付今度歩戻被仰付候衆之内二步三步通り被返遣候衆之分は拾三年納崩之御借銀埒明候年迄は戻石物成之内貳つ五歩之分は公儀え御馳走候様にと被仰出候事

付先年御改之節は小身にて罷居候付一步通り被召上其後立身被仰付只今は二步通りの身躰に罷成候衆手前之儀戻石は一步通被返遣候へ共二つ五歩之物成は各並に戻し石之内より可有御馳走事

付御改以後御加増被遣候衆之分は今度之歩戻し下地にて被返遣候共公儀へ差上候貳つ五歩之物成は御加増分と浮米を以可被差上候事

付先年歩上り之節借銀付上候衆之分は各より一年増候而納崩御借銀埒明候翌年迄貳つ五歩之物成可有御馳走候事

付小身衆御歩行御陣僧三十人衆足輕御中間以下壹歩通被返遣分は戻石より貳つ五歩之物成不及御馳走候事

一御先代御手廻に被召仕候衆并御近習通り之衆御扶持方御切錢被遣來候者御當代石に御直し大組へ被差加候就夫前々より之如御引付銀百目に米五石替之沙汰にして御扶持方引加五つ成高に被直遣候然處各より之御理に餘小身之仕合に候條四つ三步高に被仰付被下候様にと被申出候前々より石直り四つ三步高

に被直遣候例無之候得共右之衆中之儀は御先代別而苦勞被仕たる衆に候
大照院様御存生にて被成御座候は、御加恩被遣衆も可有之候得共御代替之儀
に候へは其段は耽々不被成御存知儀に候其上正保三之歩上りをも未被返遣候
條先各より御理被申出候辻々被途御分別四ツ三歩高に可被直遣旨其節被仰出
候左候而物成之儀は年々給領ならし辻を以勘渡被仰付候故右之衆中之分は御
改以前之御恩より只今之持懸之物成大分各勝手に罷成候然時は最早歩上り被
返遣に不及儀に候得共彌被加御慈悲正保三に差上候歩上り被返遣本石之辻を
以前々より之如御引付五ツ成高に被仰付足石之分此中之持懸りに被引加可被
遣之旨に候事

付今度戻石被仰付本石に引合半石有之時は高五斗迄は捨り五斗より上の分は
石に足被遣候事

付自今以後無給衆持懸自然御心入を以石に直し被遣候時は前々よりの御引付
のことく五ツ成之可爲御沙汰事

一正保三御改以後新地被遣候衆の分は不及沙汰御加増被遣候衆手前の儀も最前
の持懸り計え歩戻し被仰付候事

一正保三御改以來親子兄弟別々御恩持來候を御理申上一ツに御引加被遣候衆の
分は其身最前より持來候御恩計え歩上り被返遣一方えは歩戻不被仰付候事

一家業有之者に被對其藝知行御扶持等被遣置親々は相當々々に家業相勤候付而
其子共えも以御慈悲跡職無相違被立遣置候處末年若耽々御用に不立も有之又
は歳比にても其身不心懸故其藝親々程に無之者の分は太以不謂儀と被思召候
加様の者は此度御差引をも可被仰付候得共一旦此段被仰渡後年の作法被聞召
上何の道にも可被仰出の旨候然間右之類の衆えは今度の歩戻不被仰付候事
一足輕御中間之内より侍に被召直候者之分は其跡え替之人柄罷出其身は立身仕
事候條歩戻は先組へ被返遣其者えは不及御沙汰候事

付足輕御中間之内何ぞ御用に付て其組をはつれ別段之御役相調候者之儀は
其身立身不被仰付事候故先與へも其者えも歩戻し被返遣候事

一今度歩上り被返遣候へ共御借銀明候迄戻石之内より二つ五歩之物成御馳走仕儀候條諸御役目之儀は此中之分限石辻を以所勤可仕候事

付貳ツ五歩之物成御馳走不仕年よりは持懸り之石辻諸役可被相勤候事

付御軍役之儀は各別之御事候條何時にても戻石本石引合先高之辻を以當り

前之御役所勤可仕旨に候事

一寺社家之儀は諸役御免許之儀候條歩戻御沙汰に不及儀共に候へ共彌被加御慈悲只今之持をりに一步通り浮米を以可被返遣旨に候事

付御祈願所并御先祖様御位牌所之寺家取繕相當々々之儀は自力を以可被相

調候自然自分手遣に可相成儀を差捨置及大破公儀え於被訴は其住持可爲

曲事

付寺社家御浮米之内近年は御理申上春夏之間度々に勘渡申付候由被聞召付

候御家頼諸役被仰付候諸士さへ堪忍料被遣候時分相定候處寺社家より之

理無作法之儀と被思召候自今以後は堪忍料本浮米共に惣並に勘渡被仰付

儀に候事

一步戻物成之儀は來丑歳より可被返遣旨候事

一貳歩上地所可成などは先地を以可被返遣候若入組候所先地被戻遣候事難成分は別所にて替之地御引當可被遣候條分地之沙汰仕拜領候様と被仰出候尤望地之分は一圓に不被聞召入候事

一步上り之地にて候共御藏入に被仰付候はて不叶所之分は別所にて替地可被遣之旨候事

一御家來分限通り衆より江戸被差上候證人衆堪忍之儀御改以前は親々之知行之内高千石宛諸役被差除たる迄にて從公儀御心付等は不被遣候御改以後親々知行歩上り被仰付に被對於江戸御心付御扶持方等被遣候此度歩戻被仰付候上は御心付等一圓不被遣等に候得共納崩御借銀明候迄戻石之内より貳ツ五歩之物成御馳走被仕儀に候條其間之儀は上下貳拾人分之使者催相御扶持方於江戸從公儀可被遣之旨候事

一大組江戸御番手之時催相銀御家來中より助銀を以仕立被仰付江戸にての御扶持方は公儀より被遣候然共今度歩戻被仰付候上は江戸にての御扶持方銀をも助銀同前に割符候而御家來中より出銀仕候様にこの儀候然間寅之年よりは於江戸大組へ被遣る御扶持方從公儀不被遣筈に候事

一御改以前は高貳百石通り迄は自力を以馬所持仕筈に候歩上り以來は公儀より馬之喰被遣候歩戻被仰付候上は如先年貳百石通迄は自力を以馬所持仕候様に被仰出候事

付納崩御借銀埒明候迄は二ツ五歩之物成戻石之内より御馳走仕儀に候條其間は如此中從公儀馬之喰可被遣事

付對御役馬之喰被遣候分は各別之事

一正保三御改之外色々にて面々持懸之内減少之儀有之候此度は正保三步上り一通り之御沙汰候條其外之儀は不被聞召入候事

已上

右之辻被仰出候條謹而可被相守此旨者也

萬治三子
十一月二十八日

- 榎 本 遠 江
- 堅 田 安 房
- 益 田 孫 左 衛 門
- 毛 利 隱 岐
- 毛 利 主 膳

按ニ過ル正保三年是ヨリ前十四年ニ於テ祿制減却ノ方法記載詳悉ナラス諸臣祿給ノ内斷然割削シテ二分方減却セラレシニヨリテ家祿ノ多寡ニヨリテ一分方又ハ三分方モアリシト見ユ其實況ハ此度差出サレタル條諸臣一般生計ニ困シ十數年ノ久シキ今日ニ至リテハ頗ル苦楚ニ堪カタク結果ヲ成セリ公御初世ヨリ此事ニ深ク焦慮アセラレ一昨年御歸藩ニテ情實ヲ視察アラセラレ惘然ニ堪ヘサセ玉ハサル故諸老臣ト協議セラレシカトモ當時國計釐正方法ノ年度モイマタ尖ナラス負債ノ辨償ニ行足ラヌ實況ヲ聞シ召シ昨年ハ在昔過サセラレ此回ノ御歸國ニナリテ御

憂慮ノ餘リ奮激ニ堪ヘサセラレス朝廷并幕府ヘ對シテノ供費ハ御心ニ任セラレサレトモ内務ノ減省且私奉匱乏ノ艱苦ハイカニモ耐忍アラセラルヘシトノ御仁慮ニ体シ諸老臣及ヒ會計ノ屬吏ニ至ルマテ同心勉勵シテ終ニ斯舉ニ及ヒシトナリ然ル故ニ此時外債ノ額ヲ削減シテ十三ケ年ニ辨償スル方法ヲ建ラレテ既ニ半ニ過タリ今此法ヲ廢格セハ數年ノ勉強ノ功モ烏有ニ屬スベケレハ此削減償還ノ年度ヲ過ルマテハ還附祿額ノ内ニツ五歩ヲ減却シテ其餘ヲ給與スヘキ旨ヲ達ス此還附祿制ハタトヘハ地所ヲ給與セラレシモノ又ハ年々米給ノモノハ或ハ地所ト米給ト相交ルモノ等ノ種類ニテ夫々差等アリ故ニ種別等級等錯雜セルコト多シ大記録冊八ノ卷ニ就テ其詳細ヲ知ルヘシ

十二月朔日諸臣登城歳暮ヲ祝ス公謁ヲ賜ヒ杯酒亦例ノ如シ

十三日節酒二十一日御煤掃ノ式例ノ如シ

二十八日大坂ノ土佐堀一丁目ニ屋敷地ヲ購求シ邸宅ヲ營造セシム後寛文三年元祿十年十一年十五年ニモ増擴又ハ修造セリ

月日不詳是歲開拓本所深川地新撰年表

本記拾遺附錄

二月十一日竹子姫鷹司家へ入興以來叻米并付屬人へ知行役扶持心仕付米銀高左ノ如シ

一 知行貳千石

右竹君様え被進候御知行高之分

一同六百八拾四石

右神谷庄右衛門仲市左衛門赤川玄清知行高之分

一米三百石

右大將様え被進候御米之分

一同貳百九拾七石壹斗五升

右御付之衆御扶持方百六拾七人分神谷庄右衛門拾人分赤川玄清大庭善兵衛

大中七郎右衛門松本作左衛門島田文右衛門奥村源之允平田勘右衛門赤川玄

棟五人宛坪井甚兵衛七人分井上藤兵衛六人分平田源二郎松本長助後藤瀬兵衛おそや新七二人宛山崎四人分御小人御雑色御食焼御手廻り御中間六尺と
もに貳拾貳人は貳人扶持宛共如此

一同四百九拾七石六斗

右は御付之乗并女房衆御切米之分治部卿お上ろう三拾石宛山崎貳拾石小上
ろう津山少將十八石宛おはいおりうおはんおつれおきよおそや拾七石宛お
さとおせつくめ拾六石宛さつやさおもよ拾貳石宛こちや拾三石すまふかせ
御小人三人八石宛たく坪井甚兵衛松本作左衛門拾宛石大庭善兵衛大中七郎
右衛門三石壹斗宛御食焼貳人御手廻り壹人御雑色三人御中間三人安左衛門
四石宛六尺九人貳石七斗宛ともに如此

一銀三拾五貫貳百八拾三匁

右御臺所御賄萬諸入目銀并女房衆上取野菜銀共に壹ヶ月貳貫九百四拾日貳
分宛之當りを以如此

一同八貫六百目

右御入國之時より此以後年々銀貳百枚宛被進候

一同五貫九百七匁六分

右催相銀之分神谷庄右衛門上下九人仲市左衛門上下六人赤川玄清上下三人
上日別壹匁八分下壹人日別六分宛にして如此

一同四貫六百貳拾四匁四分

右月別御心付銀平田勘右衛門三拾五匁坪井甚兵衛井上藤兵衛大庭善兵衛大
中七郎右衛門三拾壹匁宛松本作左衛門拾五匁島田文右衛門奥村源之允平田
源二郎松本長助後藤瀬兵衛貳拾五匁御小人御手廻り御雑色御中間共拾人四
匁三分宛新七四匁御食焼六尺共拾貳人三匁五分宛共に如此

一同壹貫五百目

右御切錢之分井上藤兵衛貳百七拾目赤川玄樸貳百五拾目なるせまかき百目
島田文右衛門奥村源之允貳百拾五匁宛

一同六百六拾目

右治部卿小上のうえ小判五兩宛被遣分如此

一三百八拾貳匁五分

右仲市左衛門馬儀相日別壹匁貳分五厘にして如此

以上銀五拾六貫百四拾七匁五分

米にして千九百六拾五石壹斗六升貳合五勺

但三石五斗和市にして

高にして四千五百五拾八石壹斗壹升七合

但四ツ三步にして

米千九拾四石七斗五升

内七石八斗は神谷庄右衛門馬喰大豆米に直して

高貳千五百六拾貳石三斗九升五合

知行高貳千六百八拾四石

合九千八百四石九斗壹升貳合

高辻

以上

萬治三ノ

二月十一日

七月十一日白井又右衛門跡職六拾石ヲ實子清吉ニ命ス

二十四日毛利主膳留守居役ヲ命ス毛利隱岐益田越中兩人ハ一年替ニ留守居役勤務

シ地加判ハ主膳榎本遠江定役ニ命セラル毛利宮内病ニ依リ留守居役ヲ免ス遠江ハ地當役ハ

留守居役ヲ兼務ス

八月六日佐々木九郎兵衛跡職養子長吉十四歳ニツキ本知之内百石沒收六百二十石

ヲ長吉ニ命ス厚母七郎兵衛同百五十石ヲ實子長兵衛ニ三戸右兵衛同嫡子八助隱者

ツキ二男熊之介へ相續ヲ請願ス熊之介三歳ナルヲ以テ知行五十石之内三十石沒收

二十石ヲ熊之介ニ命ス萬代勘兵衛六月五日弟又三郎養子ノ請願ヲ爲スト雖トモ同

十日死去ニ付知行二十七石沒收セラル藤井喜大夫跡職百十五石ヲ養子七左衛門へ

命ス外ニ跡職ヲ命スルモノ一八

同日日野左近井上五郎兵衛ニ寺社奉行ヲ命ス渡邊増庵同苗吉之允復仇ノトキ前後
盡瘁ノ狀公開ニ達シ窄人分五人扶持ニ毎年米三拾俵宛下付十一月二十日家計困
難ナルヲ以テ拾人扶持ニ現米三拾石宛支給セラル醫師繪師恭將基之役ヲ寺社方ニ
管セシム宍戸藤兵衛江戸公儀向聞合役ヲ命ス町奉行井上六兵衛ヲ免シ山川二郎左
衛門ニ命ス京都御用所高須五郎兵衛相役ヲ神代六左衛門ニ命シ五郎兵衛六左衛門
交番トス桂五郎左衛門神村文左衛門御藏元上勘問役ヲ命ス

九月十四日木梨喜左衛門長井治部右衛門西山六左衛門福原又兵衛目付役ヲ命ス

二十日目付役財間五郎左衛門桂權左衛門伊藤彦右衛門國司忠兵衛ヲ免ス長井治部
右衛門組ヲ杉岡九郎兵衛ニ木梨喜左衛門組ヲ井上半左衛門ニ管セシム

十月十日片岡六左衛門跡職四百八拾石ヲ實子權右衛門ニ坪井七左衛門同百石ヲ實
子長兵衛ニ粟屋忠左衛門同實子新太郎十一歳ナリ八月十九日忠左衛門死去ス制法
發布以前タルヲ以テ木知之内十石沒收三十石ヲ新太郎ニ命ス飯田七左衛門跡職實

子彌藏ニ命ス

十六日福原三郎右衛門へ目付役ヲ命ス

十一月二十日福原又兵衛微祿ニテ日付役就職セルヲ以テ役中現米三十石宛年末支
給ノ命アリ其他加祿家格昇進前後數十人アルモ略ス

十二月二十八日志道六左衛門跡職實子太郎左衛門ニ臼井彦左衛門同養子勘兵衛ニ
命ス外ニ跡職ヲ命スルモノ一人

萬治三年歟年號不分明大記録卷十
夏ノ部

去年凶歉ニツキ郡村諸民慘狀ノ景況視察役員へ政府ヨリ内訓條書左ノ如シ

覺

一 諸郡當作付無別條相調候哉自然不作所共有之哉見合之事

一 去惡年ニ付而在々村々百姓痛之輕重見及之事

付村々百姓女子牛馬等ニ至迄分散有之哉無別條哉之事

一 郡奉行衆郡廻り之時手子之者并下々不法などは無之哉之事

一代官衆才判所にて諸事之被申付様并作法いかやうに有之哉之事

付才判所にて何にても私かましき儀無之哉之事

付手子之者作法之事

一庄屋畔頭間并百姓との間別條無之哉之事

一在々いつれの所にても不審成もの居候は其所之庄屋預ヶ置可被罷戻事

一道橋井手川除等いかやうに有之哉見及之事

一何事にても御法度之被仰出候儀堅固に相守候哉狼有之哉之事

一徳地長沼才判所杉市郎右衛門罷歸居候哉惣而有所聞候物音共無之哉能々聞合

之事

一御藏入人給によらす本道筋内證として作替申儀共有之哉之事

一山中市うせ物地下沙汰聞合之事

一代官衆其外役人役所くにしかと不被相詰候哉前々は色々狼なる儀有之たる

通物沙汰に候此節如何有之哉之事

右見分之者え別紙に被相合覺書と相見へ書付記之

御條目ト云記録ニ依レハ十一月七日御目付福原又兵衛外四名ヨリ當役毛利主膳外

四名へ伺書ノ末左記ノ條書脱落アリ此ニ記載ス御條目ニハ十月二十七日トアリ

此段本書之分に沙汰可被仕候事

一千石以上之局之儀は古小袖被指免候其外不依大小身にかつき仕候通之女下着

には古小袖之分可被指免哉尤上着之分木綿たるへし此段如何可被仰付之事

此段今年丑之歳より卯之暮迄三ヶ年之間は被指免候辰之正月よりは古小袖下着

にても着仕候儀一切停止之事

一町人女之衣装下着には御法度之古小袖にても被指免候此段年切を以何年迄は

下着被指免候通被仰付如何可有御座哉無左候ては古小袖と準結構止申間敷と

奉存候事

此段承届候本書之分に沙汰可被仕候事

一御家來諸侍相煩之時在郷などより萩被罷出或在郷へ罷越被申候節乗物之儀急病にて御座候は、御奉書無御座候とも病人より申越次第各承届指免可申候煩急に無之候は、御奉書被申請候様に可申達と奉存候此段如何可被仰付哉之事
此段足輕以下たりといふとも禮錢香奠之取遣無用たるへき事
一足輕以下禮錢香奠之儀諸士同前にて可有御座哉之事

毛利十一代史卷之九

大田報助編次

泰巖公記九

寛文元年辛丑五月五日改元正月朔日諸臣登城歳首ヲ祝ス謁見賜杯例ノ如シ
二日大廣間ニ於テ諸初ノ式アリ
三日公書院へ出満願寺へ美酒ヲ賜ヒ眞言僧社家修驗へ杯ヲ賜フ
四日公步行初トシテ満願寺ニ詣ス其出ルニ臨ミ大廣間ニ於テ鷹ヲ覽ル歸城ノ後隨從へ通杯ヲ賜フ
五日諸寺ノ僧徒へ謁ヲ賜フ去々年ノ如シ
八日吉川内藏助登城年首ヲ賀ス
十一日嘉例ニ依リ物始ノ儀ヲ行フ遠地ニ在ル諸臣社家寺院里正等ニ謁ヲ賜ヒ又連歌所へ出連衆へ通杯ヲ賜フ

同日南前海陸道路修繕ヲ怠ラス幕府及西國列侯往來ニ支障ヲ來サ、ルヨウ注意ス
ヘキヲ當役中ヨリ郡奉行ニ授クル奉文條書左ノ如シ

南前大通海陸道筋御藏入給領共被仰渡條々

一九州海道之儀は天下御用多肝要之所に候條宿々道橋見苦無之様に常々修補掃
除等無緩可被申付事

一上方下目よりの天下御用往還不限晝夜聊無滯様地下目代庄屋畔頭小百姓に至
迄内々手堅可被申付事

付上下往還之者夜白共に人馬無其煩宿々送可相勤之通堅可被申付事

一大通筋之川水出陸渡不相成時之ため内々渡船被仰付置候自然上使又は西國御
大名衆御通之節於水出には常々如被仰渡地下人出相可送其節之通彌手堅可被
申付事

付飛脚急用付て罷通者之儀是又無滯可差渡自然緩怠於有之は一廉可爲曲事
之通可被申渡事

一海邊之儀自他國之通船遭風波及難儀時は地下一同に精を入へし就夫天下之上
使御物運送御狀箱送之船西國御大名衆御通之節は彌無緩可送其節此段先年被
仰渡通今以相送有間敷事

付津々浦々井川口自他國之船出入之時萬事之窮内々被仰渡御法度之旨不相
亂様彌可被申付事

一九州海道之儀は如右萬事御爲肝要之所付而先年御配地之節も右之御心入を以
大身衆え御配當之由候間宿々近所に家來之侍在宅被申付公儀御用無闕如送其
節候様に内々被仕置候儀專一に被思召之旨候上使又は九州御大名衆儀御通之
節は萩より被差出衆御馳走之間に相不申事時々可有之候條左様之節は近所に
居相候家來之侍罷出御爲能様に御馳走可仕之由内々手堅可被申付置之通可被
申渡事

右之條々奉仰如此申出上は若違犯之族於有之は一廉可爲越度候條此旨手堅可
被申渡者也

萬治四丑

正月十一日

榎	木	遠	江
堅	田	安	房
益	田	孫	左衛門
毛	利	隱	岐
毛	利	主	膳

兒玉傳右衛門左

篠川六兵衛左

十四日具足祝ノ式ヲ行フ陪席ノ人員去々年ノ如シ老臣五人繁澤二郎兵衛兒玉三郎右衛門尖戸丹波楢杜隼人ヲ内寢ニ召シ伴食ノ式アリ

十五日二條家ヨリ發火大内仙洞火アリ天皇ハ白河照高院ニ行幸上皇ハ修學寺ニ遷幸アリ新院女院ハ岩倉ニ行幸啓アリ親王ハ大佛ニナラセラル公卿邸宅百十九寺院十六民屋五百五十八軒災ニ罹レリ

按ニ此時鷹司内府竹子姫居邸燒亡セリ大記録卷十六竹子姫所用ニツキ京都御用所役神代六左衛門ヨリ大坂在勤三浦七兵衛へ銀子百貫目送付スへキ通牒ニ依リ百拾貫目贈與セラルトアリ竹子姫居邸ヲ毛利家ヨリ建造セラルニヨリ營繕方役員其他ノコト地當役ヨリ江戸當役へ本年十月二日通牒ノ書翰ニ見ユ

二十一日使者大和又兵衛ヲ發シ禁裡へ披露狀ヲ呈セシレマタ使者内藤與三ヲ以テ進献ノ品左ノ如シ

禁裡へ

- 一大廣紙二百束
- 仙洞 新院 女院 女御へ
- 一各大廣紙百束

又罹災給紳鷹司九條廣橋飛鳥井其外へ小袖廣紙及肴等種々贈物アリ

二十六日公吉川内藏助及一門各家ニ至リ歳首ヲ賀ス

御規式帳書拔二十六日御一門衆へ御禮廻被成事

御太刀馬代三百匹宛

- 内 藏 助 左
- 宍 戸 土 佐
- 毛 利 主 膳
- 毛 利 龜 鶴
- 毛 利 丹 波
- 毛 利 宮 内
- 毛利 宇 右 衛 門
- 毛 利 隱 岐

右之衆中ハ面々の門迄被成御座候自分々々の門へ被罷出御太刀折紙頂戴にて御のし被差上御通り被成候事

二十八日公吉川内藏助ノ邸ニ至リ節飯ノ式アリ

二十九日公東親ノ件客冬幕府へ申請セシニ閣老ヨリ江戸留守居ニ内達ノ趣本日江

戸ヨリ報告アリ

大記録卷八公江戸參勤ノ時隨從人付立アリ左ノ如シ

暨田安房以下人名記載アルモノ百六十七人

- 一 御膳夫衆六人
- 一 御陣僧衆三十二人
- 一 御鷹師七人
- 一 御中間貳百拾二人御手廻共
- 一 御馬屋衆五拾五人
- 一 御駕籠包拾三人
- 一 御用方衆五拾二人但都合諸手子諸役者共
- 一 御供步行衆三十七人横目共
- 一 御弓銃炮衆百人
- 一 御小人七人

正月二十六日

二月二日宍戸丹後萩城代數年勤勞ニ依リ米五十俵給與板本遠江當役ヲ辭スト雖トモ強而留任ノ命アリ公首途ノ祝トシテ銀二百枚給與

九日國內社寺并町人農民給地共男女他國行之トキ處理ニ關シ當役中ヨリ諸郡所務

代へ訓示左ノ如シ

覺

一御國中寺社并町人百姓給地共不依男女佛詣或商或學文其外用所之儀付テ他國
罷出候節此中は奉行所え訴請狀指出候上無紛子細に候得は老中より之手形を
以出行申付候自今以後は寺社町人百姓他國罷出候は何々之用所にて何國え罷
越いつ比罷歸候通墨付相調請人を立尤町方は町老在々は庄屋目代給地は給主
或手代え奥書被申付被取置候上無紛斷に候は、夫々の都合人より手形を以出
津可被申付事

付於他國滯留之儀は二歳と罷居義候は、如前々各え可被申出候夫より内之
滯留に候は夫々の頭取より手形を以差免可被申事

付自然逗留之年月申校請狀之辻を相背日切過にても不罷歸もの於有之は請
人之儀は不及申奥書仕候もの共曲事可申付候依品夫々の都合人も可爲越
度事

一出家社人山伏等爲學文他國罷越滯留之儀は可爲各別候雖然十箇年より上の滯
留に候は奉行所え可被申出候其上於無紛儀は老中より手堅を以可指免事

付御祈願所并御位牌所其外限有寺社自身他國に罷出候節は是又奉行所え可
被相返事

付他國罷越請狀之分に時々罷歸候段一ヶ年被一度充撰作被仕自然不能戻者
於有之は無緩其沙汰可被仕事

付他國より就用所御國內え罷越隙明本國罷歸候は其者落着候亭主より様子
申出候上夫々之頭衆より手形を以退出可被申付事

以上

右之辻を以沙汰可被仕候以上

萬治四

二月九日

榎 遠 江

堅 安 房

益 孫左衛門

毛 隱 岐
毛 主 膳

日 野 左 近 左

井 上 五 郎 兵 衛 左

山 川 二 郎 左 衛 門 左

波 多 野 源 兵 衛 左

村 上 太 左 衛 門 左

作 間 新 五 左 衛 門 左

村 上 七 兵 衛 左

御 所 務 代 中

給 領 所 務 代 中

二十八日公參勤首途トシテ毛利宮内ノ家ニ臨訪

三十日美濃國ニテ邪徒二十三人召捕ラル備川十
五代史

三月三日萩城式臺ニ帳簿ヲ設ケ諸臣上己ノ賀ヲ受ク公病アリ謁見ナシ

七日拜領屋敷古屋敷等ニ關シ當役中ヨリ屋敷奉行ヘ訓示左ノ如シ

被仰出條々

一 寛永二十年以來屋敷奉行被仰付屋敷嚴重之御沙汰有之事候因茲寛永二十年以前之儀は不及御沙汰候條今以不可有相違事

付寛永二十年より以來買得之屋敷之事奉行所裏判之證文無之をば先年も被召上候條自今以後可爲先規事

一 屋敷間數之事慶安貳年所被定置之法を以近年屋敷御配當被仰付候間此旨應分限可有其沙汰事

付先年屋敷御配當之時屋敷繩はり之内に川堀池など入候得は現地坪數を以分限當前被遣候自今以後繩はりの内に大分川堀池抔入候は、校量を以可除遣候少之川堀池などは繩はり間數之内にして可被遣候溝之儀は大小共先年も間數之内にして被遣候今以可爲同前事

一屋敷賣買之事慶安四年以來一切停止に被仰付候今以可爲同前事

付屋敷二三ヶ所抱來候もの於小身者屋敷一ヶ所抱置其外者賣買可被申付候

千石よりは下屋敷一ヶ所抱置候共苦間敷事

付拜領屋敷買屋敷共に無余儀理於有之は僉議之上賣買可被差免事

付自然賣買被差免候屋敷隣に有之時自分之屋敷添候事其屋敷分限當前より

狭付て買添分限相當に於相成は僉議之上買添之儀可被差免事

付賣屋敷雖有之御家人之外買得一切停止之事

一屋敷替之儀者如先年被差免候雖然身上分限不相應之屋敷替は可爲停止於分限

相當之屋敷は小屋敷え替小身之衆大屋敷え被替事縱双方之勝手雖有之不可被

差免事

付雙方同間之屋敷被遣候衆之儀者其身分限少過不足之沙汰には及間敷事

一屋敷替仕候時は双方屋敷之間敷付屋敷奉行與判有之上老中判形調遣儀候若

此證文無之屋敷替仕候は、双方共に屋敷可被召上事

一三田尻山口其外諸所に有之拜領屋敷之沙汰御城下之拜領屋敷可爲同前事

付屋敷替仕候時之證文是又可爲同前事

一新屋敷地替之儀川沼堀砂原など望候は、間替に被仰付可被遣事

付古屋敷地替之儀は其古屋敷公儀御用地に於相成は如右間替可被仰付候公

用に不相成所は及沙汰間敷事

付田島之新屋敷と同上り屋舖と地替之儀可達屋敷奉行其上當所御所務代聞

届百姓作勝手次第御所務公損無之においては如先例替可被遣事

一屋敷被爲拜領候様に御斷申出候刻は其旨趣書物相調組頭迄申出組頭聞届其

書物與判仕屋舖奉行を以被訴奉行所候は、僉議之上屋舖可被遣事

一明暦二年申年之冬御家中屋敷望有之もの先祖より終に屋敷拜領不仕候は、可

被爲拜領候條可申出之通中觸候雖然其節は望之事不申出只今屋敷拜領仕度と

申出候共取繼被中間敷候去年其節屋敷拜領仕度と御斷不申上候段於道理至極

は可有其沙汰事

一屋敷拜領之衆屋敷所を差置候儀一切停止に被仰付候方角望候儀は先年も被差免候條可有其沙汰事

一於御城下土屋敷に被遣候所者堀内古萩邊ハ不及申平安古春日土原邊金屋雜色町也此内平安古土原金屋ハ川限雜色町者秋村十郎左衛門屋敷ヲ限ニ先年より被相定候自今以後屋敷拜領之人方角望仕候共此外ニ不可出事

付新地屋敷ニ被遣候衆ニハ近年御配當之餘リ地又拜領地差上候所端々ニ有之闕目ニテ可被遣之望次第漫不可被相渡之小路並能様ニ有可校了事

付屋敷を人に被遣候時ハ當所之代官被相談田島耕作之隙に不相成所引當可被申事

付同方角にて同間之屋敷望申もの二三人も有之時は任先例闕取に可被申付事
一新屋敷居籠之事ニケ年之間に居籠仕候得と先年も被仰出候秋之作も刈跡より拜領仕候者は如先規其年を除翌年より貳ケ年に居籠可仕事

付江戸定詰衆は御在國二度之間に居籠可仕此外旅役仕候衆在萩ニケ年之辻

を以居籠之沙汰可有之事

付新地之屋敷替居籠之儀は其屋敷之居籠之手切に可有沙汰事

一先年拜領屋敷賣候て在郷仕當所に居屋敷無之衆出萩就被仰付屋敷分限相當被下百坪に銀五拾目充上納候此以後も右之類は可爲如先規候事

付居籠之儀御配當屋敷可爲同前事

一先年居籠屋敷被遣候時平安古春日金屋雜色町邊は屋舖分限相當に被遣餘地候得は被預置類地並之御年貢被召上候堀内古萩邊之屋舖は分限相當に少は餘地候ても其儘被遣候此以後も右之分たるへき事付預り地之事共一町之屋敷端に面三四間之餘地有之候て屋敷並も悪敷百姓作にも難成所は被爲預置候表五間以上は屋敷に相成分量に候間可殘置事

一屋敷二三ヶ所抱來候者一ヶ所親類讓與事可達屋敷奉行其人於御家人被訴奉行所候上令僉議可差免事

付廣き屋敷所持之者親類他人によらす分與候沙汰可爲同前事

一隣間にて双方屋敷勝手有之に付て互に地少替相申度と申出者於有之は被訴奉行所候上令僉議可被差免事

一揚り屋敷有之者御校了を以可被遣之旨候然間魁望之沙汰一切可爲停止事

一闕所屋敷之儀家に付たる道具不殘令沙汰屋敷奉行可被請取垣塀并樹木以下至迄堅固に可有穿鑿事

付闕所屋敷從公儀其沙汰及延引は屋舖奉行より被申出可有沙汰事

一跡職不被立遣或知行所或扶持方同前に被召上候屋敷之事母後家女子など有之付て被加御憐愍家被遣候共垣塀門之儀は其屋敷に可付置事

付長屋之儀外之園に仕候は、塀同前可殘置事

一川端之屋敷水ニ崩候付而少シ築出水除ニ仕度ト斷於申出ハ僉議之上築出少ハ可被差免事

一沿川屋敷脇ニ之有所少屋敷ニ御引加被下候ハ、漸々ニ地上ケ仕屋敷之内ニ仕立申度と斷於申出僉議之上如先規可申伺事

一田島之間拜領屋敷所有之付而差上候は、拜領之年より差上候年迄之年貢上納可申付事

一平安古古春日土原金屋雜色町邊元來田島屋敷に相成候處揚屋敷於有之は當所の御所務代に引渡類地並之石還可申付事

一其身斷有而令在所付而居屋敷人ニ預ケ候ハ、イカ様之者ニ預置候通屋敷奉行え可相違事

一士屋敷之端々ニ新規ニ借屋作ル事可爲停止雖然於道理至極之儀屋敷奉行町奉行相談僉議之上訴奉行所可被任衆評事

一屋敷之境目を論事無禮非儀之至也双方辭讓懇懃可有之其沙汰若及相論事有之ハ雙方旨趣令僉議可被相證自然双方不分明事於有之は屋敷帳面と現間引合双方中折にして可被相定事

付境目之垣仕候時は遂案内双方より人出合細はり無相違上にて垣可申付背此法恣に仕候事於有之は其人可爲越度事

付憐問之垣可任双方云合若及相論者半分充たるへき事

一御城下之邊被屬屋敷方候條破損掃地等不見苦様見合常々無緩怠可被申付自然
破損不掃地之所於有之者侍屋敷者其屋敷々々え可被申届候町方地方濱崎之儀
ハ夫々裁判之方え其沙汰可被仕事

付御城下所々之橋破損於有之は其存知之方え可被申違事

右條々堅固被相守可有其沙汰者也

萬治四年三月七日

板	遠	江
堅	安	房
益	孫左衛門	
毛	隱	岐
毛	主	膳

國重又右衛門為

同日萩近傍山接續ノ下屋敷所有者へ御預ケ山沒收ニ關シ當役ヨリ郡奉行へ授クル

訓令ノ如シ

被仰出條々

一萩廻り山寄之拜領屋敷今以無御相違候雖然屋敷際山之儀大分取添申に付下木
草等探候山無之百姓令迷惑候間權使被差出共屋敷通り之山之内田屋之上にて
請狀取置相當ノ被預置殘分は可被召上旨候又萩廻り山寄預り屋敷之儀屋敷
通り之山數十町立山と號總て百姓之不厭迷惑被留採用民家之妨と成事其身之
私欲に耽り下々之愁を不知無謂儀なり然上は今度郡奉行代官に御目付衆を被
相加被差出其善惡を糺地下之妨と成におゐては右之預り山悉可被沒收旨候若
此儀於被致依怙は當分雖不相聞後日於郡出には可被處嚴法段堅可申渡之旨被
仰出候事

付近年守獲之山林所被相定之外被沒收上は狼藉に代荒シ不作法之跡有之間

敷之通山林究之時手堅可被申渡事

付右之被沒收山之儀は如先規百姓採用被差免候雖然立山採用之儀は御所務

代見計手形詰たるへき事

付預山之竹木山屋敷之家取締に少宛之採用并下刈等不儀者不苦候自然其所を於被差出は奉行所へ被申出候は、詮議之上於至極之理には免手形可差出事

一大小身共隠居之地として百姓之地を借被居に於ては其一代は可被赦免屋敷通之山之内相當屋敷に相副可被預置事

一預り屋敷山之分は一切可被召上之通被仰出候事

付預り地たりといふ共居籠之分は屋敷通り之山之内相當屋敷に相副可被預

置事

右之條々堅固に被相守可有其沙汰者也

萬治四年

三月七日

板本遠江

堅田安房

益田孫左衛門

毛利隱岐

毛利主膳

兒玉傳右衛門左

篠川六兵衛左

同日引見ノ蘭人ニ令スル左ノ新條アリ鎌川史十五代史十

近比南蠻トナリシ邪宗門ノ國アルコトヲ見聞セハ長崎奉行ニ訴フヘシ又本邦ニ

互市スル唐船ト私ニ通商スベカラス

三月十二日上關役人村上太左衛門病ニ因リ勤務ニ堪へ難キヲ以テ平岡一郎兵衛ヲ添役ニ命シ交番トセシム

同日天野新兵衛跡職五百石ヲ實子采女二湯淺權兵衛同二百石ヲ實子喜兵衛ニ服部七郎左衛門同百十五石ヲ實子長三郎ニ井上平兵衛同百二十石ヲ實子九郎三郎ニ命ス兼常德庵自費ヲ以テ上國ニ赴キ茶堂方修業ニ付米三十俵支給高橋又左衛門數年勤務盡瘁且長ク江戸隨從ニヨリ米三十俵支給

十四日毛利右京綱元初著甲冑于時十二歲
十七日御手回兩組低利延期公借ニ關シ兩頭ヨリ窺書ニ對シ地江戸當役中ヨリ肩書
指令左ノ如シ

申窺之事

此段承届候本書之分無別條候間江戸を二番に被仕候衆えは此辻を以可有御口入
候左候て年々調之儀無緩様御沙汰尤に候自然被相定所相違有之時は公儀御六借
に相成儀候最不納有之衆之儀は如御定銀百目に付高拾石充永々被召上儀候條其
御心得にて被入御念儀肝要候事
一大與衆利安銀御老中御判形を以借被申候御手廻兩組えも銀子短東相成候分は
大組同前に被仰付被下候様被存候大與之儀者太抵五年納江戸御番手兩手利上
クにて七年に相澄申筈之由候御手廻組之儀は江戸御番手近クに付二番手分利
上に仕候へは九年に明申筈に候條此段は左様被聞召届可被下候被遊御相談御
肩書被成被下候間銀子聞立可申付候以上

丑

三月十七日

兒玉三郎右衛門
繁澤二郎兵衛

毛 主 膳 松
毛 隱 岐 松
益 孫左衛門 松
堅 安 房 松
榎 遠 江 松

右肩書之辻を以可有御沙汰候以上

同日

榎 遠 江
堅 安 房
益 孫左衛門
毛 隱 岐

毛 主 膳

兒玉 三郎右衛門左

繁澤 二郎兵衛左

同日進權右衛門跡職九十五石ヲ實子喜右衛門ニ命ス南清右衛門數年所務代在勤苦
 勞ニ依リ米三十俵下付東條九郎右衛門勤務數年ニ涉リ且開作高四千石余成功古田
 同前ノ收獲アリ格別盡力セシヲ以テ米百俵下付セラル粟屋九郎兵衛隱居シ知行三
 百石之内二百石ヲ長男太郎右衛門へ殘百石ヲ五拾石宛二男次郎右衛門三男小平太
 へ分與セントノ請ヲ允ルス厚母長兵衛知行百五拾石之内貳拾五石弟半二郎へ分與
 ノ願ヲ聽許ス

十九日毛利宮内病ニ依リ留守居役免セラレ家計堪へカタキニツキ金百兩ヲ賜フ其
 他臨時賞與ヲ下付スルモノ數人アルモ錄セス

同日公萩城發船途中毛利宮内ノ家ニ臨ム二十日山口着水上山聖智院へ詣ス

二十二日城主ノ輩ニ令ス十月迄各城米ノ半高積出シ風順ヲ以テ江戸大阪大津ノ三

所ニ運漕シ淺草倉庫ニ納ムヘシ運賃ハ賜ルヘシトナリ鎌川十 五代史

二十三日公三田尻乘船滯在中浦孫兵衛宅へ臨訪同日益田源兵衛ニ寺社奉行ヲ命ス

二十八日公大阪着船大阪邸ニ抵リ夜町奉行ヲ訪フ城代へハ使者ヲ候問セシム

二十九日大阪出發

四月朔日京都に入る隨從ハ堅田安房以下數十人ニテ微行ナリ

十六日江戸着即日使ヲ以テ關老各家へ參着ヲ報セシム

十八日將軍閔老松平伊豆守ヲ使トシ之ヲ慰勞セリ公開老各家ニ至リ之ヲ謝ス

十九日萩城下消防ノ條令并火消番組合左ノ如シ

條々

- 一 御城下火事出來之節火本不構遠近御城當番之面々御番所堅固に可被相守事
 - 一 御手廻組頭自分組共に早速御城え罷出自然於被遊御出馬は御意次第可有供奉
- 尤御供之外之衆は御輿廻り其外面々之御番所火用心旁無緩可被遂其節事
- 付御留守之時も

御城近所之火事に候は、早速御城被罷出御城代并當番之組頭衆に相談火
急之節は火防之可有方便事

一御城代役并千子與共御城被罷出御城内うち廻火用心等手堅可被申付之事

一御歩行頭組共早速御城被罷出御手廻り與頭衆え相談可被遂其節事

一御手廻物頭衆之儀者大手三ッ御門并松原口之御門え組共罷出御番所可被相勤
殘衆之分は御城罷出御手廻り組頭衆え相談自然被遊御出馬候は可有供奉事

一御一門衆益田越中此五人二手にして月替りに火事有之節は火元え罷出風下

左右え分り火事番之組頭衆寄與衆被相談火消之可有方便明番一手之儀は堀内
之火事に候は蓮池市中之於火事には大馬場え被相揃往還之妨に不相成様に片
類に備被居老中より之可被任差圖事

付火本番之次第別紙書付指出候條其辻を以可有御所勤事

一大與頭八人之内御城當番副番共二組は早速御城被罷出自然被遊御出馬候は、
當番一組之内非番之衆可有供奉當番添番之儀は御番所堅固に相守御城内打廻

り等無緩可被申付殘六組之内三組充月替にして火本え罷出御一門衆被相談
無緩火消之可有方便今三組は堀内に火事出來候は蓮池市中之於火事は大馬場
へ罷出往還之支りに不相成候様與切備被居老中よりの可被隨在右但御在江戸
之節は御城副番被指免事

一寄組之面々御奏者役當番之衆は御城被相談殘衆之儀は二番にして月替に火本
え被罷出御一門衆與頭衆相談無緩火消之可有才覺明番一手之儀はほり内に火
事出來之時は蓮池市中之火事に候は、大馬場迄被罷出老中より之可被任左右事
付火本番之次第別紙に書付指出候條其辻を以可有相勤事

付寺社奉行衆之儀は御寺近所之火事に候は、兩人共に早速かけ被付火消之
衆相談可被遂其節之事

一御旗奉行御鎧奉行母衣役之儀は早速御城罷出自然於被遊御出馬は御供可被仕
御留主之節は面々之與頭え相隨可被遂其節事

一御使番役之儀は當番は御城相詰御出馬之節可有供奉殘衆之儀は火本え罷出老

中可被任下知事

一大組之物頭衆は御城四ツ之御門當番切に堅固に相守此外内々定被置候用心番
四人は市中并火本近所を打廻り自然狼藉者有之は搦捕可有其沙汰殘手明之分
は居合候組之者召つれ火本え罷出大頭え相隨可被遂其節事

付御留守之節は南之御門東之御門え一人充組共に火事有之時は罷出御番所
可被相勤事

一御目付衆之儀は當番添番兩人は御城相詰自然被遊御出馬候は、副番壹人御供
に可被罷出當番衆之儀は御座敷内は不及沙汰惣て御城内え手子之もの差廻火
用心旁手堅可被申付相殘衆之儀は火本其外方角をうち廻り諸事無緩様に見合
可被申付事

付御留守之節も御城近所に火事出來候は、一人充御城被罷出御城代并當番
之與頭衆被相談諸所御番所無緩様に被申付殘衆之分は火本其外近所をう
ち廻り見合可被申付事

一火本其外え罷出候衆面々分限相當に内之もの召連火消之諸道具持せ脇寄不仕
請取く之所え早速かけ付け可被遂其節總て火事場え罷出候衆風上或程遠侍
被居候段以之外緩を之儀候條風下くえ取懸り火消之方便無緩意可被相勤尤
御目付衆被指廻候條被得其意下々に至迄此段手堅可被申渡事

付火消之衆召連候下々之儀はかせきのために候間脇差斗にて罷出候様に可
被申渡事

付御一門衆并組頭衆寄組衆之儀は梯一脚宛持せ可被罷出候事

付火本近所に不遁間有之見廻候儀着懸り候親類縁者迄は不苦候他人は不及
沙汰此外之親類え面々之請口をばづし見廻候儀堅停止之事

付火事場え馬乗込候儀可爲停止火消之者支りに不相成様に二三町程引退片
頗に立置候様に用心番之物頭衆見合可被申付事

一諸役人衆之儀は御役所方角之火事に候は面々請取之所え早速かけ付無緩可遂
其節事

一長嶺與右衛門世木九郎右衛門山根半左衛門事火事有之節は組之者召連火本えかけ付無緩火消可申事

一御大工衆之儀は組并町大工小引等到大鋸其外火消之諸道具を持せ火本え罷出火消之行不可有緩せ事

付御役目に付御木屋方其外え罷出候者之儀は日中之火事に候は、其所所之頭可任下知事

一町人之儀は家別水田子一ツ充指出火治り候迄水之はこひ無緩怠可遂其節内々町切にしるしを仕置頭を定町奉行召連罷出見合下知可被仕町年寄之儀は跡に殘居町切に打廻火用心旁手堅可申付事

一檢所之者籠番之外は頭召連火本方角へ罷出御目付衆并用心番之物頭衆相談自然狼藉もの有之は無緩可遂其節事

付籠近所之火事に候は、檢所は不殘籠を可相守事

一御留守中之儀は御城當番并火本番之外之衆は替り、御暇被申出在所なとへ

も可被罷越候最火消番月之衆は近在所へも被罷越間敷候然共理於至極は可被指免候條内證を以相役之衆を頼置其上御暇之儀可被申出事

以上

右奉仰如斯申出上は此旨堅固に可被相守者也

萬治四

四月十九日

榎 遠 江

堅 安 房

益 孫左衛門

毛 隱 岐

毛 主 勝

火消番組合

四月

一 手

毛 利 丹 波

益 田 越 中

五月
一手

以上

右此辻を以月替り火本番可有御所勤候以上

萬治四
四月十九日

火消番組合

穴戸土佐
毛利伯耆
毛利宮内

榎遠江
堅安房
益孫左衛門
毛隱岐
毛主膳

四月
一手

五月
一手

以上

精杜隼人
兒玉圖書
安道五郎兵衛
門田太郎右衛門
益田源兵衛

熊谷主計
安道三左衛門
桂木工頭
梨羽求馬
日野左近

右之辻を以月替りに火本番可被相勤候以上

萬四
四月十九日

板	遠	江
堅	安	房
益	孫	左衛門
毛	隱	岐
毛	主	膳

二十三日公登城謁見献物如前度大刀大馬退出ニ及テ將軍マク之を召シ懇々言語アリ

公堂城ノトキ覺書提出左ノ如シ

奉言上口上覺書

公方様御機嫌能被成御座奉恐悅候次に私儀在國御暇被下緩々々休息被仰付難有仕合奉存候今度就至參勤も爲上使松本伊豆守及被成下被仰渡之御詮之旨冥加至

極に奉存候以上

卯月二十三日

松平大膳太夫

五月三日證人毛利主殿代リトシテ宍戸八助出府主殿幕府ヨリ賜暇ノ命アリ

同日江戸御留守居役宍戸民部國司隼人福原三郎右衛門事務授受ヲ終へ賜暇ノ命アリ

八日將軍下竹彌三十郎ヲ使トシ鷹捉ノ勲ヲ賜

十一日成瀬丹左衛門公參府ノトキ大津ニ於テ番頭へ告ケズ御泊ヨリ先ニ進ミ職務ヲ怠リタル科ニ依リ家臣ヲ放ツ

十六日竹内正兵衛末武市郎右衛門小野彌左衛門ヲ罰ス公參府途中正兵衛遺物方都合人ヲ命シ附屬ノ末武小野兩人ト予盾シ双方共違法ニ依リ庄兵衛扶持方沒收末武小野ハ國返ヲ命ス

二十一日東大寺沙汰所ヨリ國衛東大寺領歩戻ノ件ニ關シ板本遠江ト往復書翰及地當役中ヨリ江戸當役へ伺書翰左ノ如シ

幸便候條一筆令啓上候先以殿様御機嫌能江戸御參勤目出度奉存候然於國術東大寺領之儀に付て去年御國之寺社奉行より候人中え被仰渡趣儘以承届候内々は御家中諸侍え地方被差返砌東大寺領も惣並に返し可被下旨堅御約束申かと覺申處に御家中面々は如先規被仰付由承及候若左様に御座候は、東大寺領之儀も御家中並に可有御座様に奉存候左様に無御座事各不審に被存に付て貴様迄内證書狀にて得御意候彌右之通必定に御座候哉何も追々可得御意候間不能詳候恐惶謹言

東大寺

五月六日

板本 遠江 守松

沙汰 所

尊墨致拜見候如仰大膳殿江府參勤仕合能致太慶候貴寺御無異之通珍重奉存候然於國術東大寺領之儀に付て此方寺社奉行より候人中え申渡候趣被聞召届候内々家中諸士え地方差返候節は東大寺領惣並に返し可進之由御約束被申候通被仰聞候最前御斷之節は拙者も承候へ共澄口之時分は散々相煩様子不存候先代已來之借銀于今不埒明候得とも家來諸士心之外痛申付て爲救色々指引候て返遣被申

候寺社方へ之儀は校了を以先一列に差返被申候委由徳留八郎兵衛方へ申送候條可爲演說與存候恐惶謹言

萬治四丑

五月二十一日

東大寺

板本 遠江

御沙汰 所

尊答

一筆得御意候東大寺沙汰所よりの書狀徳留八郎兵衛去る二十日遠江所え持參仕候其趣は先年御改之時分國術領之下地被召上淨米三百五拾石被遣候其節何角出入有之於江戸御老中寺社御奉行衆より少々被成御助言御家來中え下地被返遣候時は固術領之儀も可被差返之通大照院様御證文被遣其節之出入相澄申之由候此段は各様も淵底可被入聞召と存候遠江より之返狀には御先代以來之御借銀于今不埒明候へとも御家來中心外痛申に付爲御救色々御差引被成歩上り被返遣候又寺社方之儀は先御校了を以一列に御差返候通返狀相調今度歩戻被仰渡之趣を以

八郎兵衛遠江口上にて濃々申合候御證文有之上は別段返事可仕様無之候故先寺社方一列と返事仕て御座候内證爲間合とは有之候へ共以來右之返狀いつれえ可出も難相計に付て歩戻り員數等をは書付不申先御校了を以一列と書付申候多分此脇其御地へも御理可被申上と存候自然爰元へも又々被申越候時は如何返事可仕候哉先年澄口之首尾福間彦左衛門淵底可存候條被成御尋御僉儀之上相縮所思召寄之通可被仰聞候其内之儀は於爰元はいかにも難相計候間幾度にて先右之首尾に返事仕候外は有之間敷と被存候

一此度東大寺沙汰所より遠江所へ被差越候書狀并返狀之扣等寫候て差上せ入御披見候

一國術之儀様子承合候所先年三上檢地又熊野究之節大分石踏上ヶ其上東大寺領之時分給人共數人彼地に在居仕候付て手作なといたし東大寺よりは手先之義に候得は所務も苛被仕候故心之外地下人痛申たると相聞候依夫近年御藏入に相成候ても先年之痛于今直り不申候間何とぞ御救被遣候へかし無左候は、此

己後亡所可仕と波多野源兵衛も申儀御座候然は國術田島高九百四拾石余有之候へ共右之分心外地下痛申付て所務成かね申候近年之物成と浮米三百五拾石と引合沙汰仕候處多分年々貳三拾石程之御入足に御座候其上又今度之一步被返遣候時は年々五六拾石程之御入足之筈候左候時は浮米にて被遣候よりは國術領被返遣候かた御勝手には可相成哉と存候浮米被遣候は御不勝手之様には有之候へ共下地被遣候へは以來ゆりすはりたる様に有之候との儀迄に候畢竟各存候處は御代々御證文殊更大照院様御證文之御僉議迄御座候此儀は於爰元にも多分今度之御在江戸中東大寺より之御理被申出にて可有之と御沙汰有之候何之道にも御吟味候て被仰伺御意之趣可被仰聞候

一先年國術領出入有之候時最前は遠江御使仕候澄口之時は散々相煩候故御使をも不仕候に付しかゝ様子不存候大照院様御證文之御扣拜見申候處いかにも御堅約之御證文御違變難被成せ首尾に御座候此御證文に御座候へは太抵沙汰に相成候共何共被仰立被成せかね候はん哉と被存候然時は太抵沙汰に相成候

て被返遣候はんよりは御内證にてふり能彼方にも辱被存候様被仰渡國衛被返遣候かた可然哉と存候乍此上何ぞ被仰立之廉も有之候へは申事無御座候於手今は御證文之御僉議迄に相究候様に被存候いつれの道にも御吟味候て可被仰窺候恐惶謹言

五月二十五日

榎 遠 江
毛 隱 岐
毛 主 膳

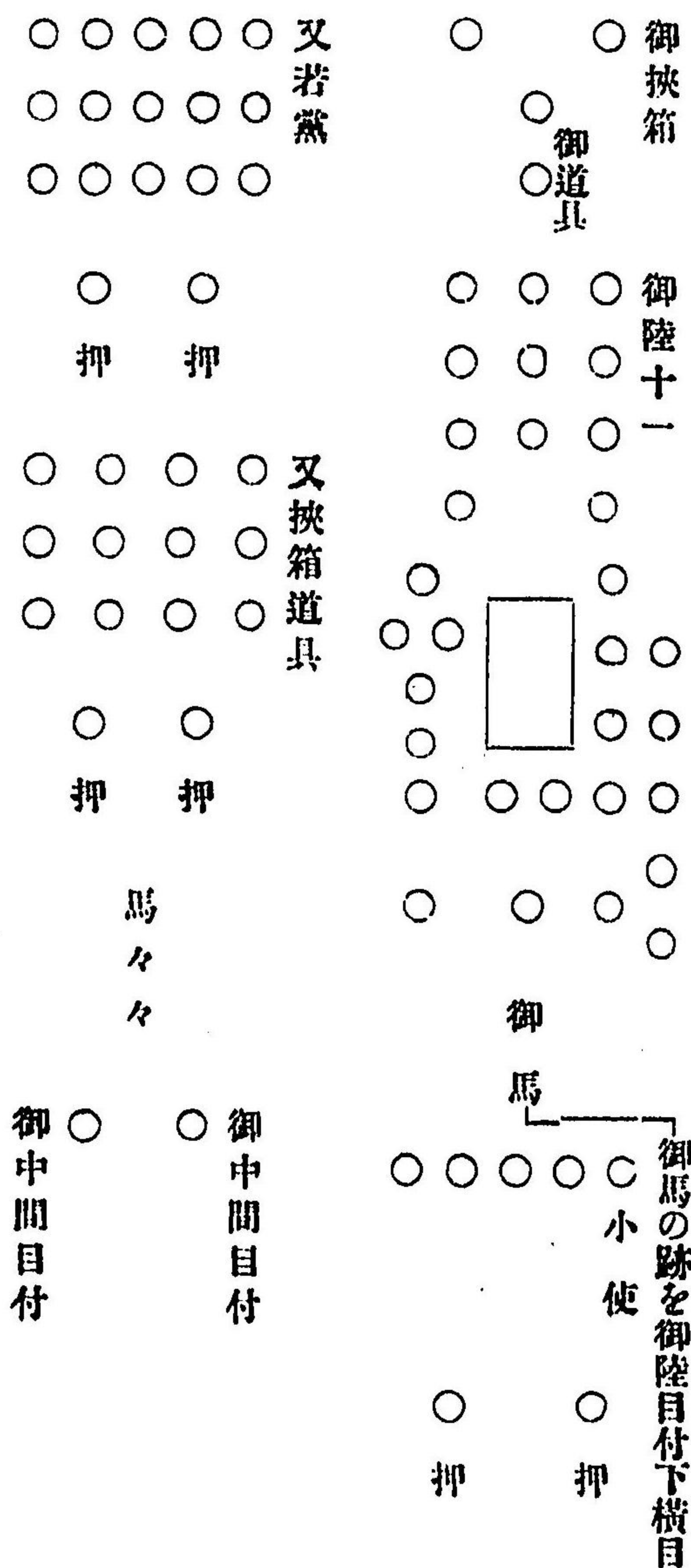
益 孫左衛門 松
堅 安 房 松

六月二日赤木藤右衛門跡職三百石ヲ實子勘八ニ井上七郎左衛門跡職百五拾九石ヲ實子一郎兵衛ニ兒玉與兵衛跡職百五拾石ヲ實子小十郎ニ命シ采地ヲ領セシム外ニ跡職ヲ命スルモノ二人

三日増上寺防火ノ件公參府後指令ナキニ依リ關老へ伺ハレシニ増上寺近傍火火ノ

際ニハ從前命令ノ如ク消防人數差出スヘシトナリ

五日公途中行列ニ關シ幕府へ伺ヒ允許ヲ得ルモノ左ノ如シ登營ノトキ大城下馬トナリ



又若黨

又挾箱道具

馬々々

十六日嘉祥ノ式行ハル公登營例ノ如シ

二十四日長崎奉行ヨリ此四月二日先年本邦ニ住居セシ鄭成功臺灣ノ地ヲ攻取リ居

住ノ蘭人皆逝去リ其内二艘長崎ニノカレ來レル旨ヲ注進ス徳川十五代史

二十五日龍昌夫人七回忌ニツキ天徳寺ニ於テ法會ヲ修ス

同日村尾平左衛門遠法アリ逼塞ヲ命シタルモ山手夫人ノ庇護ニ依リ逼塞ヲ免ス事

由不詳

二十六日御鷹匠井上彦兵衛重科アリ幽囚セシモ山手夫人竹子姫ノ辨明ニ依リ一命ヲ助ケ遠流ニ處ス

七月朔日榎本遠江當職中御藏元諸役員へ傳達ノ條書明曆四年八月二十日御藏元并傳達條ノ書ト異ト異同一ナリ并御米方御銀子方吳服方御細工所濃物方御買物方御貸銀方各役所ノ取締ニ關スルモノ七通アリ略

同月今回郡中制法頒布ニツキ其施行細目七十五條ト三十七條ヲ以テ當職榎本遠江ヨリ郡奉行諸代官へ異見ヲ徵シ訓令スヘシト訓示セリ長文ナレハ略ス

四日幕府評定所へ公儀役ヲ召シ閣老ヨリ切支丹宗門制禁ノ高札年號改元ニツキ建替ヲ爲スヘシ切支丹宗教ハ累年嚴禁セラル然ルニ去年九州及美濃尾張ヨリ邪宗者

ヲ出シ死刑ニモ行ハル向後一層深ク之ヲ搜索スヘキヲ傳達セリ其書付左ノ如シ

覺

一きりし丹宗門御制禁之高札今度年號改元候間書直可被相立事

一きりしたん宗門之者今以所々より密々あらはれ捕之候何方にかくれ可有之も

難計候間家中并領内彌念入相改之不審成もの於有之は可有穿鑿事

一町人百姓五人組を定庄や町年寄無油斷改之様に領分堅可被申付候自今以後他

所よりあらはれ於捕之は其所之庄屋町年寄手前遠穿鑿油斷仕不相改儀無紛候

は、科之輕重にしたかひ可被行曲事事

以上

寛文元年七月四日

右之被仰出に付諸家之様子聞合被仰付候へは毎年月々改被仰付御方も有之候又一季に一度宛四季に四度改被仰付御方も有之候一年に一度改被仰付御方も有之に付御兩國之儀は一年に二度宛自今以後毎年改候様にと被仰付候事

○神文は先年度々被仰付候故今年よりは請狀に被仰付候先年神文被仰付以後
誕生之男子は十五歳に成候は、五人組へ加神文可仕之通被仰渡候又先年御
究之節幼少にて今年十五歳に罷成候は、今年神文可仕之通被仰渡候事
○五人與連判之書物に妻子をも書加人別名之頭に且那寺印判を押宗門無紛段
奥書を取可指出事

○五人與不足無之様に五人より上七八人迄は組相にても不苦事

○男女によらず自今宗旨替候は、此中何宗にて何寺且那に候へ共宗門を替何
宗に罷成何寺を且那に仕候通證文相調尙且那寺奥書を取それく之首頭迄
可指出事

○婦人之儀は其夫或は其親證文仕且那寺奥書取可指出事

○五人與之儀は不及申他寺之内にも不審成者と存寄於有之は可申出事

○請狀之判形御一門兼與頭衆より組衆は御留守居番所にて判形可仕與付之者
は其與頭にて判形仕其請狀は與頭手前に取置公儀へは與頭より面々與中相

究之通請狀仕可指出候足輕御中間其外御ふち被遣候者可准之物頭之儀は與
中相究候通之書物福原左近方へ可指出御中間頭其外少御ふち被遣候夫々之
首頭請狀は御藏本へ可指出候

○又うちは主々より可相究事

○在々諸浦之儀は御藏入は御所務代給領は給主より庄や畔頭町年寄へ申付此
者共より相究百姓請狀は庄や畔頭町年寄之手前へ取置候所務代給主へは庄
や畔頭町年寄より請狀仕可指出候

○町人は町奉行より町年寄へ申付町切に相究町中之請狀町年寄手前に取置町
奉行町年寄より請狀仕可指出候

○寺方よりは面々且那書物奥之外に對寺社奉行書物仕可指出候今度宗門究被
仰付候付且那人別名書之頭に印判つき指出候分少も不審成者無御座候自然
此以後無心元者於有之は可申出候萬一不審成者を不申出相慥候通脇より被
聞召候は、いか様にも可被仰付之通證文仕可指出之

○住持職替之時は當住より對寺社奉行證文仕可指出之先師より之且那今以無相違候此以後何とそ不審成儀存寄候は、可申出候通書物仕可指出之先師之時に且那宗門替候者之儀は別紙に付立右之書物に相添可指出之

右之辻を以自今以後一年に二度宛之改可仕之通被仰出候事

十七日和智十兵衛井上平左衛門新山勘右衛門過失アリ返塞ヲ命ス

十八日和智藤兵衛跡職二百石養子内記ニ久芳長兵衛跡職養子三九郎ニ命ス外ニ跡職ヲ命スルモノ二人

同日勝間田權左衛門數年吉田御茶屋番兒玉勘左衛門花岡御茶屋番精勤怠ラサルヲ

以テ權左衛門へハ米二十俵勘左衛門へハ四人扶持ニ切米六石ヲ賜フ外ニ家格昇進

及米銀賜ルモノ四人

七月二十一日本年五月十五日榎本遠江ヨリ財政計畫ニ關シ江戸當役堅田安房へ照

會ニ對シ回答左ノ如シ

但目論見物一冊ハナシ

五月十五日之御狀令拜見候去年井上七郎左衛門兒玉藤右衛門え被仰付候御所帶之大目論見物其節書立之以後又々引方之廉々出來に付て兒玉藤右衛門え入増之廉々書添候様にと被仰付彼方相調候付て此地へも一冊被差越此中一覽仕候大分之不足銀に候條此以後之御所帶御續難被成可有之と非大形存候か様御座候ては此以後何とそ御仕與をも被替やうに無之候ては後々御續難被爲成可有之候然時は何とも苦々敷儀共に候互に此儀氣遣仕事候此地よりも大坂上着米之辻彼地御賣米之直段彌承合過不足之沙汰可仕候此御地にても御内外ともに御遣方へり申事は無之次第に御物入之儀は出來添申様に有可之と心遣仕事候恐惶謹言

七月二十一日 榎 遠 江 棧 堅 安 房

八月朔日關所女通行ノ制證人奉行ヨリ令ス 德川十五代史國々御關所覺附勤番之衆書立アリ

十六日三井六郎兵衛病死ス男子ナシ六郎兵衛生前請願モアリ本地二百石ノ内六拾

五石トナシ甥左門ヲ甥養子トシ跡職ヲ命セラル張一郎左衛門病死ス嗣子ナシ同名

猪左衛門弟半介ヲ髡養子トシ跡職ヲ命セラレタシト病中請願ス一郎左衛門數年ノ勤勞ニ對シ跡職百石之内六拾五石ヲ半介ニ賜リ髡養子ニ命セラル糸永七郎兵衛松岡玄竹病死ス隱居役ニツキ制法ニ因リ跡職ヲ命セス同日夫人へ銀子三拾貫目大廣三九小廣二九中小杉五九番茶拾二石使用料トシテ毎年進セラル、ノ命アリ

二十六日將軍拓植平右衛門ヲ使トシ鷹捉ノ雲雀ヲ賜フ閏八月三日氷上聖智院へ大猷院殿靈牌安置ニツキテハ靈殿建設ニ關シ板本遠江ヨリ江戸當役へ照會江戸ヨリ回答ニ對シ其回報左ノ如シ

逐而得御意候當春御立之節安房殿拙者え被仰聞候は氷上聖智院え諸國大猷院様御位牌被爲置様御尋候所聖智院諸所見合被申分御物語被申之由候大猷院様取分殿様え之御心入不淺儀共に御座候間何とぞ御靈殿被仰付度儀に候條聖智院え得與申談尤之由被仰に付て日左近被申談聖智院え相尋候處先松平筑前守殿御建立之御魂屋如形結構に御宮作之ことく被仰付候其外三四ヶ所見合候分

は古跡之寺客殿を新敷被申付御位牌被成御立方多御座候御宮作之様に被仰付候時は以之外御造作入扱又後年之修補旁御造作入之由御事に候氷上山之儀は大跡古跡と申本堂かたゝ結構なる靈地其上今年悉再興被仰付候間客殿を新敷被仰付御位牌被立置可然と被申候聖智院被申様尤成儀と存候

- 一左候は唯今之客殿を聖智院へ被下候は、只今之庫裏不可然候條右之客殿と居間と庫裏とに用候様仕度と被申候
- 一右之ごとくに候時は御祈禱所無之候間自力を以護摩堂建立可仕と被申惣て護摩堂之儀頼にも取立申度存候へ共叡山に久々滯留仕一圓手透無御座候故延引仕申候兎角存立たる儀に候條此節より用立仕せ候て手遣被申候材木等之儀は諸所御立山にて免候様にと被申に付て差免申候

一再來年は大猷院様御年忌之由候定て御法事被仰付にて可有御座候然時は此節より御沙汰無之候へは間に相申間敷候材木取之儀も此節より申付儀に候彌於被仰付には御窺之上御意之趣被仰下次第其沙汰可仕候

一客殿之大きさ唯今之客殿程にて可然と被申候拙者など存候處もさのみ大きに被仰付候ても後年之修補旁御造作之儀候條聖智院被申分に被仰付可然と存候一御國中御普請諸所破損大分之儀に候大寧寺客殿内造作も頓により申付大形此節出來申候

一龍文寺客殿之儀此節より材木取申付少木をかゝりし來春早々より作事に取付可申と其用意申付候

一御家來より之出人只今迄は八百石に一人充差出申候氷上客殿再興被仰付候は、四百石五百石に一人充も可差出候哉御家頼近年無手透御普請役之もの被差出候條御伺之上御奉書被差下可然存候

一聖智院被申様は安房殿え得と御物かたり申分今以別條存寄も無之候間左様可相心得之通被申何れの道にも急度御報に可被仰聞候主膳殿隠岐殿えも此段申達候先爲御間合候間拙者より如斯御座候恐惶謹言

閏八月三日

榎 遠 江

益 孫左衛門格
堅 安 房格

去ル比大猷院様御位牌氷上山に可被立置通聖智院内存各存寄之趣遠江より得御意候處品々被達上聞之由去月十五日之御狀に被仰聞拜見仕候然は彼寺客殿之儀彌新敷被仰付御位牌可被立置旨扱又此中之客殿は聖智院御理之分に被途御分別彼僧可被遣通被仰出之由候則右之趣寺社奉行衆を以申渡候客殿材木取之儀も御家來出人を以山口廻りにて採用仕候様にと其沙汰申付儀候此外先日遠江より得御意候御返事候故不克細報候恐惶謹言

十月二日

榎 遠 江
毛 隱 岐
毛 主 膳

益 孫左衛門格
堅 安 房格

五日國內開作究ノ爲メ藏田與三左衛門國司庄左衛門都野小左衛門諸那へ派出ノト
キ伺書ニ當役中肩書指令左ノ如シ

覺

此段先年兩人究之分は再檢に及間敷候併一ほのき切に畔段并石辻共にちり札に書
付其田ノに立置せ見可被通候其上見かけ相違之所候は、再檢可被仕候事

一先年開作爲御究牧野五郎左衛門都野小左衛門被差出候時現田畠石もり付御
帳調置申候所之儀は此度御再檢可被仰付候哉又は先年之分相違無之所見合仕
迄に可有御座哉之事

此段地下向子細有之時は罷出相談仕埒明候様に奉書可遣候子細於無之は御所務時
分萬事障にも相成儀候間出相申間敷事

一御檢地之時御藏入御所務代衆并給領御所務代衆も被出相其沙汰被仕候様に御
奉書被遣可被下事

此段先年請狀仕置年月過只今迄開立不申所之分は可被召上候條被得其意以來共無

紛様に御所務代衆相談可被置候此節迄に開立有之候分は檢地石かけ等可被申付事

一最前御奉書申請候内開立殘地之分其主仁身軀相應を以後年何年を切開立可申
通御請狀御取置せ候此辻に被開立候へは申事無御座候少にても殘地御座候所
之儀理之依品今一兩年も御差延可被遣哉之事

此段下地可被召上候條奉書取返可被申事

付右之分に御奉書申請一圓に手付無之分は如何可被仰付哉之事

此段先年究之節仕すへ候百姓此節無之候共田地丈夫之作人有之候は、苦間舖候縦
百姓有之にても先年究之節より以來田地惡敷成候所之儀は能々見合被仕可有其
沙汰事

一先年御究之時開作所に仕居被申候百姓此節分散仕候共開作之田地作人御座候
て以來不作無之様に候は苦間敷哉之事

此段開作境目之儀能々被入念最前之奉書旁被見合其所之御所務代衆相談を以埒明
可被申候給領入組之所は拜領之地とても山河共に御藏入之儀候故給主之山と申儀

無之候就中開作田地に田付之山と申儀有之間敷候諸事地下之障不相成様に沙汰可被仕候併開作之田地水かゝり之ため少々立山預り置度との儀候は、旁并御所務代衆被開届上理於至極は其所之百姓へ可被願置候尤田地之邊り少宛之分は被付置候ても苦間敷候事

一開作所境目又田付之山など之儀に付て地下人と出入御座候時は各談合仕又は御所務代衆と申談僉議之上於其地下相證可申哉之事

此段本書之分可有沙汰事

一開作所御奉書何町何段と申上御奉書前之外を開候付て牧野五郎左衛門都野小左衛門其段相究餘石之御帳調置候此度も加様之所御座候時は其段見届所之御所務代衆申談御帳各別に相調可罷歸哉之事

此段奉書被見合并先年都野小左衛門牧野五郎左衛門宛辻旁被引合彌所違に相極候へは被召上筈に候條其沙汰被仕御所務代衆引渡可被罷戻事

付御奉書に取候所を開立又村を違又は一村之内にても所を違開立仕候付て前書

之分に兩人相究所違之御帳調置候此度も加様之所御座候は、御帳各別に調置可爲申儀哉之事

此段奉書無之分は沙汰及間敷事

一先年牧野五郎左衛門都野小左衛門宛以後御奉書不申請開作仕候段此度被申出候衆自然御座候時其意趣相尋候處に開作之所柄被見立其節之御取次之役人を以御當職え被申理候へ共御奉書をは不被遣御口上斗にて御開せ候所無紛首尾に御座候は、見合可被仰付哉之事

此段理右同前之事

一一給一郷一村持被申候衆開作付被申候時は御奉書無御座所之儀に御座候間見合仕間敷哉之事

此段承届候何村にて山野不殘と奉書被申請衆にても先年より居かゝり候百姓屋敷廻り并作分田地之邊之分は差免開せ候はて不叶儀に候就中開不仕以前に百姓少宛之開作仕置候を證據物之内にて付取申儀は甚以不謂儀候先年開作宛被仰付候

時も被召上由其節之老中衆肩書物にも有之事候間今度も其所之儀悉可被召上候條御所務代え引渡被罷戻此方えも可被申聞せ候事

一何村にて山野不殘開作成立次第と員數付立なしに御奉書被申請候以前に地下御百姓作分之邊り又は屋敷之端々にて少宛開仕候をも御證據物之内にて開作主仁え付取被申事も可有御座候加様之所先年も御座候付て牧野五郎左衛門都野小左衛門兩人より書立を以御肩書申請其沙汰仕候此度も自然加様之儀御座候は先年之分に可被仰付哉之事

此段承届候窄人開作之儀證據物有之分は可被相究候物成之儀は先差免追て可令沙汰事

一窄人衆御奉書申請開作被仕立御物成公納被仕候衆之儀は申事無御座候此節迄御物成何之道にも不被仰付衆之儀は御物成可被仰付哉之事

此段承届候此度旁究に不及候面々より被申出次第逐て可令沙汰事
一何某領内にて何成地損所何程御座候此開替に可仕との御理申上御奉書申請開

立申衆之儀開替に立可被遣哉之事

此段承届候奉書申請候開作禮物なと取別仁え遣候儀は甚以不謂儀に候無左候ても一旦申請候開作所公儀え不遂案内余人え出し候分は無作法之儀共に候條可被召上候併開作之主人入替之時公儀え申出證據物於有之は惣之開作同前に沙沙可被仕事
一御奉書申請其開作之地別人え禮物にて所望仕被申候歟又は双方禮物取遣りなく余人え出し被申所之儀は如何可被仰付哉之事

此段右同前之事

一御奉書申請其御奉書之内少充傍輩中え書狀にて所望之方え分ヶ遣候衆御座候被申請仁其節之御當職え様子詛被申請候は先主可爲同前哉之事

此段承届候開作所之儀はいつれも地下之支り無之と申理に付て先年より免被遣來候處開作をば不仕立所之山など留山に仕仁有之候へは甚以不謂儀共に候條御所務代衆被申談可被召上事

一御奉書申請作りをば不仕立其所之山留山に仕候付て地下より理申出候は依其

品御所務代衆と申談可被召上哉之事

此段承届候古田古島之支りに相成所於無紛は被見合其沙汰可被仕事

一御奉書を以開作仕候山野古田古島水木之支り無之所之由地下より書物出し候

處に山など立申に付て後之年古田古島之支りに成申候由新儀に地下より理申

候は所之御所務代衆申談其沙汰可仕哉之事

此段承届候少之開作有之とて其方角に牛馬つなき候事法度に申付候儀不謂儀共候

條御所務代衆被申談其沙汰可被仕候尤開作有之所え牛馬放飼作毛喰荒し候様に仕

候は方角之百姓曲事に可申付通可被申聞事

一山野之内にて少開作有之とにて牛馬つなき申儀も其作人より法度申付候所之

儀地下より理申出候は御所務代衆申談其沙汰可仕哉之事

此段承届候此度之儀は證據物有之分斗被相究其外は及沙汰間敷事

一先年牧野五郎左衛門都野小左衛門開作御究に被差出候時開作之所柄御座候て

御奉書可被下之由被申上候へ共其節御奉書をは不被遣所柄之儀は兩人可見合

之由に付て所柄見合罷歸様子申上候加様之所此度如何可被仰付哉之事

此段承届候否戻之儀は何とても被召上事に候條可被得其意事

一熊野藤兵衛究以來之永否地損之所自然今度開作之内に有之所之儀可被召上哉

之事

此段理右同前之事

付三井藏田檢地以後之永否川成所開作之儀新開作同前に立可被遣哉之事

以上

右之趣御肩書被成可被遣候は、其旨を以沙汰可仕候以上

寛文元ノ

閏八月五日

都野小左衛門

國司庄左衛門

藏田與三右衛門

裏

板本遠江守及

右面書十八ヶ條付り書共に肩書之辻を以其沙汰可被仕候以上

同日

榎 遠 江
毛 隱 岐
毛 主 膳

藏田 與三右衛門及

國司 庄左衛門及

郡野 小左衛門及

按ニ開作究ノ件ハ先年牧野五衛左衛門郡野小左衛門ニ命セラレ其後年序ヲ經テ今日ニ至リ兩人究ノ如ク差違ナキヤ重テ調査ヲ爲シ体ニ依リ開作地ヲ本石ニ直サルヘキヲ以テ今回ノ命令アリシ所以ナリ郡野小左衛門國司庄左衛門藏田三右衛門ノ職名詳ナラス土地検査ニ經驗アルヲ以テ臨時使用セシモノナルヘシ
十一日御船手御郷助左衛門跡職實子十郎兵衛ニ命シ百石ヲ領セシム
九月十一日吉敷郡氷上山真光院ニ牌殿ヲ設ケテ大猷院殿ノ靈牌ヲ安置シ更ニ高百石ノ地ヲ寄附シテ供養料トセシム

按ニ承應二年二月十四日大猷公三年忌氷上山ニ於テ執行ノ處ニ記載セシ如ク新ニ社地宮殿ヲ設ケタルニ非ス客殿ヲ新築シ牌殿ヲ設ケテ靈牌ヲ崇祀セラレタリ
按ニ此靈牌供養料寄附ノ事其時ノ記載セシモノ見ヘス後享保三年ノ舊記ヲ按スルニ是時ニ高百石ノ地ヲ寄附ト見ヘタリ其後殿有院殿靈牌ヲ安置ノ時其故ヲ以テ真光院現住行海僧正ヘ對シ開拓地貳拾町ヲ下シ與ラレ開墾成就ノ上其收益ヲ以テ脇坊十字ヲ造建スル方法ヲ設ケラレタリ此寺ハ國內ニ同宗ノ寺院ナク勤行ノ時僧員ニ乏シキ故塔宇増建ヲ要スル
尙其後有章院殿常憲院殿文昭院殿等ノ靈牌安置アリテ其時々多額ノ銀子ヲ寄附セラレシニカクテハ限制ナク寺則モ立カタルヘシト評議アリテ享保三年十二月ニ左ノ如キ定規トナレリ然ル後ハ往年靈牌増加スル時ハ御遠祖ヘ供スル分ヲ節減シテ御近靈ヲ重クスル規制ヲ定メテ現住權僧正救海ヘ下附セラレタリ

一高百石
右大猷院殿靈牌安置ノ時寄附
一同貳百石

右前住行海願ニヨリ許允アリシ開拓地二十町ノ地租ヲ石代ニシテ收入ノ豫額

一同貳百石

右當度寄附

其後寶曆三年ニ至リ尙ホ歴世ノ靈牌増加スレハ自ラ規制立カタカルヘシトテ古ヘノ廟制ニ倣ヒ五世以上ヲ減省シ祭祀料銀十枚宛牌數ニ應シ支給スル方法ヲ立ラレタリ委シテハ寶曆ニ見ユ

十四日脇八郎右衛門右筆役ヲ命シ五人扶持ニ切錢三百三拾五匁ニ直シ支給後藤瀬兵衛雇ニテ神谷庄左衛門ヘ付屬セラレタルニ江戸召上セ記録所添番ヲ命セラレ三人扶持ニ切米四石新規ニ支給山田半兵衛數年雇ニテ用方命セラレ精勤怠ラサルヲ以テ三人扶持切米四石新規ニ支給

十九日萩町人大黒屋六兵衛ヘ判座ヲ命スルトキ六兵衛ヨリ町奉行山川二郎左衛門藏元兩人役中島忠兵衛兒玉藤右衛門ヘ提出ノ請狀アリ大記錄卷二十九坤

按ニ判座ハ貨幣ノ眞贋ヲ判定スルモノカ延寶五年藩紙幣ヲ製シ國中ニ通用セシナレハ銀札製造ハ此ノトキニハ非サルヘシ

十月九日將軍加藤平内ヲ使トシ鷹捉ノ鶴ヲ賜フ

十日佐伯源左衛門ヲ罰シ逼塞ヲ命ス櫻田邸工事ニ關シ過失アルニ依テナリ

十三日毛利隱岐益田越中江戸留守居役交替十一月朔日ヨリ越中勤務ヲ命セラル波

多野六兵衛跡職養子茂左衛門ニ命シ百三石ヲ領セシム井上五郎兵衛病死ス生存中

同名主水ヲ養子ノ許可ヲ得ルモ父子不和主水逃走末期ニ至リ養子ノ請願ヲ爲サス

千石ノ知行返付ヲ願ヒ沒收セラル

二十一日公病全癒登營賜鶴ヲ拜謝ス

二十八日萩城式臺ニ帳簿ヲ許ケ諸臣賜鶴ノ賀ヲ受ク

十一月四日久芳長兵衛本年五月病死ス生前跡職ヲ三九郎ニ命セラレント請フ其奉書國許着以前三九郎死ス祖先以來數代奉仕ノ家ト雖モ三九郎養子ノ處理ナキニ依リ跡職ヲ命セス平川長左衛門跡職生前實子權兵衛持掛ニ加ヘ後ヲ繼カシメント請

フ先例ナキニヨリ持掛ハ沒收シ跡職ハ權兵衛ニ命セラル波多野六兵衛跡職百三石
養子茂左衛門へ命ス外ニ跡職ヲ命スルモノ一人

同日江戸勤番ニ定詰ニ番共徵祿者成規ノ外一人或ハ二三人自辨ニテ從者ヲ増シ在
勤セシニ少祿ノモノ之レニ堪ヘカタキヲ以テ高百七拾四石以下近習通迄ハ成規ノ
外ノ人數何程隨從セシムルトモ壹人分ノ増扶持江戸在勤中支給セラレ高百七十五
石ヨリハ成規ノ外支給セザルコトトセリ

九日村尾勝兵衛目付役在勤中暴慢ノ行爲アリ家臣ヲ放ツ

二十五日後藤平右衛門頓死ス跡職ヲ實子傳兵衛ニ命シ五拾石ヲ領セシム外ニ跡職
ヲ命スルモノ三人

十二月朔日客月十六日大津郡向津具へ朝鮮ノ漁船一隻漂著ノ報アリ之ヲ幕府ニ申
告セラレシニ長崎へ送致スヘキノ命アリ

十九日家來中領地俸祿共ニ歩方去秋還附ノ布達アリ然ルニ御馳走米ヲ出スノ間ハ
ニ歩上リノ時ノ石辻ヲ以テ諸役命セラル、ニツキ諸御禮代モ本石悉ク還附迄ハ二

歩上リノ石辻ヲ以テ公納スヘキヲ頒布セララル

同日市川三郎右衛門病死跡職八拾石實子與三右衛門ニ村井與右衛門跡職六拾二石

實子庄兵衛ニ吉原傳右衛門跡職實子源之介ニ命ス御船頭津田市左衛門跡職五拾石

養子平太夫ニ命シ家ヲ繼カシム

月日不詳鷹司房輔公政所竹子姫男次郎君ヲ生ム後西園寺權中納言兼敦ト稱ス

本記拾遺附錄

正月二十八日益田孫左衛門近年屢江戸隨從ニ依リ物頭役ヲ辭ス

二月七日物頭役ヲ福原左近ニ命ス坂戸七郎右衛門へ遠近方ヲ命ス曩ニ林勘兵衛高
杉又左衛門へ遠近方ヲ命セラレタルモ又左衛門江戸隨從ニヨリ此命アリ

九日黒澤丹宮へ記録所出頭ヲ命ス村上主税所轄ノ歩行士ヲ丹宮へ管セシメ江戸へ
隨從セシム末近二郎兵衛ヲ福原左近ニ屬シ勸務セシム

七月十八日兒玉勘右衛門花岡御茶屋番數年在勤セシニ徵祿堪ヘカタキニ依リ一人
扶持ニ三石ノ加祿ヲ賜フ其他六名家格昇進恩賜金アリ

同日諸臣公借返還ニ關シ訓示左ノ如シ

一御家來中古借銀先年御藏銀を以一通り調旨被仰付其調之之儀は元一倍を以納之筈候得共御役目繁者之儀は于今相滞候間元銀壹貫目を一貫五百目にて一兩年に調切候様に被仰付可然之通御國より申來候付て安房孫左衛門相談之上達上開候へは前後あたり相又御公儀御むつかしさに不相成候は、右之分に調之沙汰可被仰付候旨被仰出候事

九月十四日小侍從ニ其身一代三人扶持ニ米拾五石ヲ賜フ龍昌夫人ニ隨屬シ且ツ公世子ノトキヨリ多年勤務ノ勞ニ依テナリ外ニ米銀賜ルモノ三人

毛利十一代史卷之十

大田報助編次

泰巖公記十

寛文二年壬寅正月朔日公江戸邸ニ於テ年首ノ儀ヲ行フ例ノ如シ

二日公登營謁見將軍ヨリ小袖壹襲ヲ賜フ

二十一日江戸留守居役飯田平右衛門數年勤務セシモ老年ヲ以テ其職ヲ辭ス桂彌左衛門板本八郎左衛門有地又右衛門三隅作右衛門長屋又右衛門數年知行總浮米ニ申請セシモ子年制法發布以前ノ請願ハ許可ヲ與ヘサリシニ領地不毛且家計困難ナルノ事情ヲ察セラレ總浮米ヲ許容セラル夫人媵臣富永治左衛門年五十以上ニナリ乘與請願書ヲ幕府目付へ提出セシニ二月二日聽許ノ令アリ山手夫人松平越後守光媵長室秀就ノ女臣中村七兵衛數年江戸在勤セシニ祝融ノ災ニ逢ヒ家計困乏勤務ニ堪ヘ難キヲ以テ萬治二年十一月銀子貳拾貫目公借ヲ請願セリ先ニ六貫目貸與其後種々特旨アリ本

年正月最前ノ六貫目ニ補足シ貳拾貫目御納戸銀ヲ以テ公借ヲ許シ一ケ年二貫五百
目宛本年寅暮ヨリ酉ノ年迄八ケ年ニ祿高ノ中ヲ以テ毎年公納スヘシトナリ

二月八日作事奉行保田若狹守宗雪切支丹改ヲ兼ヌ

世ニ傳フ切支丹穿鑿ノ書一冊アリ此宗雪カ録スル所ニシテ先輩井上政重北條氏
長ノ傳フル所也其中ニ宗雪命ヲ蒙ル時ノ事ヲ載ス忠清忠秋正則伺候有台命云々
仰ニ曰切支丹邪徒制禁支配自前代爲要務重事也自今與北條安房守氏長同可沙汰
之云々又其邪教ノ本意ヲ録スル者數條中ニ曰ク聖人ノ如ク天下ノ政道正シク治
リ吉利支丹ノ修行ヲハツハ一ノ如ク致候テモ其人デウスノ氣ニ入ラズ候ヘバ上天
不罷成候主ヲ弑シ親ニ背キ大罪ノ者モデウスノ氣ニ入候ヘバ上天イタシ候トノ
教ニ候由伴天連共何レモ書上候トアリ又日本ノ編ヒ此宗門ヨ又曰主君ノ命タリ
トモ切支丹ノ法ニソムカザル者ハ殺スベカラス又デウスヲ信バズ候ノ如ク勤メ
ザル者ハデウスヘ敵對フユヘ主君親ニテモ殺サザレハハライソヘ至リガタシ果
シナキハライソニハカヘガタキ故ニ主君親ニテモ殺スガ道也ト記セリ是レ徳川

氏ノ邪教ヲ以テ大害トシテ痛ク之ヲ誅鋤セシ本意ナルベシ今日ニ在テハ既ニ其

禁ヲ弛ム學者深ク慮ル所ナカルベカラズ徳川十
五代史

二十六日穴戸九郎左衛門ニ青山邸留守居ヲ命ス江戸留守居役口羽又兵衛飯田平右
衛門ト交替スヘキモ平右衛門辭職ニ依リ又兵衛ヘ勤績ノ命アリ乃美五左衛門留守
公用勤績ノ命アリ長井治部左衛門留守目付ヲ命セラル要路一覽乃美五左
衛門差判役トアリ
同日波多野源兵衛跡職三百四拾石ヲ養子源介ニ熊谷太郎右衛門同百八十石ヲ養子
九右衛門ニ板本平右衛門同百拾五石ヲ養子作右衛門ニ井上清兵衛同四十四石ヲ養
子右衛門ヘ命ス

二十八日黒書院ニ少老久世廣之土屋數直寺社奉行大目附町奉行作事奉行勘定頭郡
奉行ヲメシテ今後前代ノ遺志ヲ守リ奢侈ヲ去リ素儉ヲ守ルヘキ旨面命アリ又各其
所存ヲ上言セシム徳川十
五代史

三月十四日洞春寺ニ於テ千部執行ニ關シ江戸當役ヨリ地當役ヘ通牒ノ左如シ

一筆得御意候御當家御祈禱之ため御代々千部被仰付候ヘ共近年中絶仕候御前様

打續被成御流産か様之御ためにも御座候條千部被仰付可然被思召之通山之手御
前様御内意に付其段申上候得は御尤に被思召候間於洞春寺千部可被仰付旨候當
四月五月六月之間今月吉日御沙汰して御祈禱之千部執行可被仰付候調之次第旁
之儀は於其元御沙汰可被仰付候恐惶謹言

寛文貳年

三月十四日

堅 安 房
益 孫左衛門

毛 主 膳檢
益 越 中檢
榎 遠 江檢

去月二十一日追而之御狀拜見仕候然は於洞春寺御祈禱之千部執行可被仰付之旨
ニ付去ル時分申進候處ニ此中其沙汰被仰付先年御執行之様子存候僧衆えも御尋
萬事御仕組御日取滿願寺え被仰渡當月六日より開白之由一段可然存候右之趣御

序を以可達上聞候將又天樹院洞春寺住持此節在京ニ付而右之様子被仰遣早々被
下罷等之通是又令承知候恐惶謹言

五月八日

堅 安 房
益 孫左衛門

毛 主 膳檢
益 越 中檢
榎 遠 江檢

洞春寺御祈禱之千部之諸御入目付立
一米九石四斗五升貳合

但御賄米上白中白平壹合五夕減にして

一銀三百八拾八匁

但御木具之代

一同八百九拾六匁四分

但御菓子之代

一同三百拾五匁

但麩そうめん豆腐之代

一同七百七拾五匁

但八百屋物之代

一同三貫六百四拾貳匁

但御布施之分

一同六百拾八匁八分

但馬料往來之分

一米三拾八石七斗

但打給米日數十五日分

合

米四拾八石壹斗五升貳合

銀六貫六百三拾五匁貳分

一右之外に御藏物紙ろうそく金銀之薄茶鹽噌醬油酒油人夫炭薪かはらけなどの類は直うち不仕候事

右は於洞春寺に御祈禱之千部御執行之時御賄方并御布施馬料共に御入目大形如此御座候以上

十二月十四日

長嶺 左兵衛

同 又右衛門

中島 忠兵衛 檢 藏本兩人役ナリ

按ニ千部讀經の典は洞春公の創意にして一時停廢し寛文二年再ひ之を修む今其願文を按するに曰く夫れ法華は諸佛出世の本懐にして衆生成佛の直道なり毎歲千部十年に満ちて一萬部とす造次顛沛も至勝すへし寡人元就布衣より起り戰闘百餘度三尺の劍下に其塵する所殆ど數千萬願は此法水に浴して永々怨讐の念を變し却て遠々守獲の心を抱かん予が子孫たる者は此誓を重し創業の艱難を遺れ

すして法華の一會永々退轉する勿れ寡人欽して上下の神祇に告げ以て嘯岳和尚に囑すと

諸事小々の扣に云一千部被仰付候次第之事右は先年元就様宗瑞様御代にも御家長久之御爲被仰付候通上々様被聞召上尙大膳様御代にも御家御祈禱之御爲殊更殿様今年御やく年又御前様打つゝき御流産被遊候間彼是御祈禱之爲め今年より千部可被仰付候旨寛文二年二月二日山ノ手御前様被成御意其年より毎年四月四月に千部洞春寺にて被仰付候然は其後千部に付て在々より罷出者も有之候處に田作時分其上日和悪敷時節に候故諸事支も有之通御國より申來候に付達上聞寛文四年よりは年々五月に取付可被仰付候旨同年卯月三日に被仰付候事

一右之千部御祈禱寛文十一年迄十ヶ年之間御成就之事

十七日關老河越城主松平伊豆守信綱卒去ニヨリ諸大名登城ス今年正月ヨリ病ニ臥ス紀伊尾張水戸甲府ノ諸卿來問フ其臨終ニ三代將軍ヨリ賜フ所ノ直書數通悉ク燒失セシメ灰トナシ死後之ヲ棺中ニ納メシム岩付平林寺ニ葬ル此人ノ明敏ナルコト

世ニ傳フルコト尤多シ人ノ皆知ル所ナレハ今之ヲ略ス徳川十

按ニ證人ヲ還シ殉死ヲ禁スルニ條ハ皆信綱卒後ニ發ス大佛ヲ鎔シテ錢トスルモ亦寛文八年ニ在リ而シテ世皆信綱ノ決行スル所トナス余未タ其何故ナルヲ詳カニセズ抑モ信綱生前之ヲ決シテ死後ニ之ヲ行フ歟或ハ他人ノ決行スル所ニシテ其美悉ク信綱ニ歸スルカ世未タ之ヲ疑フ者アラズ故ニ今特ニ書シテ以テ之ヲ世人ニ質ス

二十日春定并檢見ノ方法當役ヨリ郡奉行へ授ル訓示左ノ如シ

春定并檢見之事

一春定之事御所務代衆一才判所村切ニ物成可被相定春より秋之毛上難計儀に候へ共田地之厚薄僉儀之上相定儀に候畢竟御公損も無之百姓之痛にも不成様に可被相心得事

一百姓別に作面之内にも地之厚薄可有之候條百姓共抱之田地名寄坪付帳被申付一作人抱之田地石代ほのき別穩より念を入幾ツ成に相候段能々沙汰候て右之

評付帳に書付被置其上人別抱之田地物成高下をならし合一作人分幾ッ成に相
定候通下札横帳調渡可被申事

付右之分に人別其沙汰にて一村切之あたり被申付一裁判所之都合幾ッ成を
如前に春定帳可被調出事

付地下ならし有之所は一免之村定又人別定之所も有之由候百姓手前能々檢
儀被仕むらなき様に仕組肝要に候定辻を以銘々引退に被仕候儀は高下可
有之候歟田坪く稔盛之沙汰を以念を入被相定可然候但銘々作分無高下
段無紛候は、一免にも苦間敷候哉此段御所務代衆吟味專一に候有増に被
相心得御公損成候儀共於有之は可爲越度事

一如此春定申付候上現在之損毛無紛候時は如先規之檢見可被仕事

一右春定之大抵如斯に候才判所村々百姓之爲替田地之厚薄石掛り田之こやし下
草の仕むけ水かゝり年々の毛上出來見合春定之節能々可有僉儀候此外は御所
務代衆心置次第御爲可然儀共於有之は可有其沙汰候若又右之書出之内に所に

依之其仕組難成事候は、可被申出候承届候上可被沙汰候事

一檢見之事其村其田地により品々可有之候其段其所務代衆存寄を以或檢地檢見
或は落し檢見又廻し檢見などにも可被仕候尤其所之庄屋畔頭ともへ少も依怙
最負并田地曳替など仕間敷之通如先規手堅神文血判被申付下見念を入相調さ
せちり札を立置せ其上御所務代衆見合可被申候自然田地引替其外惡調仕もの
有之通訴人に罷出候もの於有之は依其品褒美可遣候本人之儀は一廉曲事に可
申付事

一檢見に出し候田は早田より一圓手付不仕内可申出事

一其年の依風規檢見申請度と理申出百姓於有之は縦横之石高にて候共檢見可被
仕事

付檢見に差出候田若春定之辻無相違出買於有之は一廉曲事に被仰付候へと
其田主書物に庄屋畔頭奥書被申付御所務代被取置自然書物之辻於相違は
御所務代校了を以過料可被申付事

一 初之引口并檢見有米之歩引等之儀如先規有體之沙汰たるへき事
一 檢見高千石より内は如先規御所務代見合可被申候千石より上は其様子被申出候は、加勢可申付候條其仁被申談御所務代衆加勢衆へちくに無之やうに檢見可被相調事

一 才判所之内御所務代衆内意を以百姓に損毛指除心付被仕候事有之間敷若痛候百姓心付仕候はて不叶様子候は、爰元被申出候上令沙汰可差除事
一 右檢見之太抵如斯候此上御公德之儀又は百姓迷惑不仕様に仕組被申候事御所務代衆才覺肝要之事候因茲先大形書出申候此内所により依品箇條之分に被仕苦敷儀共候は、可被申出候依其趣可令沙汰候事

右春定并檢見之次第書出申候此辻を以御所務代衆え可被申渡候已上

寛文貳壬寅年
三月二十日

篠川六兵衛左

榎遠江

兒玉傳右衛門左

四月四日諸臣屋敷配當代價下付金ニ關シ訓示アリ其趣意左ノ如シ

御家來中へ屋敷配當被仰付候付先年より終に拜領不仕買屋敷に而罷居候者へ安堵銀被遺候へは御家中一同に拜領屋敷之沙汰に相成候に付而買屋敷都合百三十八ヶ所此儀先年公儀より田地買候儀被成御免被遺候時之直段にして一段屋敷百五拾目之沙汰を以拾七貫七百目餘公儀より可被遺之旨被仰出候

同日杉岡九郎兵衛跡職四百石ヲ養子源八へ岡庄兵衛同百石ヲ實子與三左衛門へ坂井喜左衛門同六十石ヲ實子久馬之介ニ命ス

八日鯖山禪昌寺三田尻正福寺ト本末矛盾ニ關シ審問ノ後正福寺ハ遠流禪昌寺ハ附金五枚ニ處セラル此解決ニツキ江戸當役ヨリ地當役へ回答左ノ如シ

追而之御狀拜見仕候鯖山禪昌寺三田尻正福寺本末出入有之に付何とぞ内證に而相澄候様にと寺社奉行衆手遣候へ共双方無納得に付於御客屋寺社奉行御目付衆へ被仰付及再三被入御念様子御究させ候處双方申様不分明其上正福寺大科之廉

々有之又禪昌寺申分は無筋目事にては無之候へ共些妄語有之に付寺社奉行究無疎候へ共禪昌寺儀は限有之古跡に付彌被入御念可有御沙汰と御惣談にて於天樹院大寧寺龍文寺瑠璃光寺海湖寺亨德寺隆景寺妙玖寺兩寺社奉行御目付衆其外役人衆各様御一座に而双方申分御札明候處に最前寺社奉行被相究候趣無相違正福寺不理禪昌寺妄語無紛に付正福寺住持遠島禪昌寺過料銀五枚被仰付之由承知仕候其外此公事に携候者共へ應其品過料或は籠舍被仰付之通是又承届候然正福寺儀代々無本寺に付證文御沙汰之上禪昌寺末寺被仰付之通得其意候右落着之儀御下向之上可有御沙汰と御思召候へ共御僉儀候て急度埒御明候由承知仕候何そ御物序も御座候は右之段可申上候將又兩寺社奉行衆此儀に不限常に無緩諸沙汰被仕之通承届候其段具に可達上聞候恐惶謹言

卯月八日

堅 安 房
益 孫 左 衛 門

毛 主 膳 檢

益 越 中 檢
板 遠 江 檢

九日專求ナルモノ道心者入獄人ノ紹介ヲ爲シ入監セシモ宗門モ判明セシニ依リ解放セラル

十日仲市左衛門神谷正右衛門代トシテ竹子姫へ隨屬セラレシニヨリ米二百俵二十人扶持銀壹貫七百二十目餘馬別當六人催相四百五拾目馬催相ヲ支給持掛リノ知行百八拾石ハ嫡子三左衛門へ賜フ

十四日坪井甚兵衛竹子姫へ隨屬セラレ功勞ニ對シ五人扶持ニ米拾二石ヲ高五拾石直シ下付井上藤兵衛竹子姫ニ隨屬セラレシニ四人扶持ニ三百目ヲ五人扶持ニ米十五石ニ直シ下付外ニ米銀ヲ賜ルモノ三人

十九日將軍阿部豊後守ヲ使トシテ歸國暇ヲ賜フ時服五十銀子五百枚下賜公登營謁見馬ヲ賜フ

五月六日村田喜兵衛跡職百石實子五右衛門ニ命ス高須八郎右衛門ノ大阪御役ヲ免

シ井上六郎右衛門ヲ以テ後任トス

十六日木原玄祖ヲ陣借番頭ニ命ス山添宗積ヘ米貳百俵ヲ賜フ多年侍醫トシテ隨從ノ勞ニ依テナリ

二十六日公江戸ヲ發シ六月十二日大阪着十五日大阪解纜二十六日三田尻港ニ入ル

宍道三左衛門ヲ使トシ出府賜暇ノ恩命ヲ謝セシム二十七日村上掃部宅ヘ臨訪二十

八日三田尻發洲山口著七月朔日歸城

六月十日將軍安宅丸ノ船ヲ覽ル數十艘ノ船ヲ淺草川ニ浮ヘ船手頭金鼓ヲ以テ之カ

進退ヲナス德川史十

十三日日光山洪水山崩壓溺者多シ一本廣王二十三日三奉行ニ令ス德川史十

切支丹ノ義ハ累年御制禁タリト雖モ今以テ絶ルコトナシ諸所ヨリ捕來ル者アレ

ハ公料私領寺社領町在五人組又ハ檀那寺ニ於テ嚴シク穿鑿ヲ遂クベシモシ不審

ナル者アラバ地頭代官ニ訴ヘ江戸ニ於テハ北條安房守保田若狹守方ヘ訴出ベシ

モシカクシオキ他所ヨリ顯ルハニ於テハ其地ノ名主五人組迄曲事タルベシト也

七月三日吉川内藤助公歸城ヲ祝シ登城内寢ニ於テ謁見

七日諸臣歸城ヲ祝シ登城謁ヲ賜フ

日不詳毛利主膳ニ當職ヲ命シ榎本遠江ニ代ラシム役人編ニ明曆三四月朔日寛文三卯二月晦日迄榎本遠江寛

文三卯三月朔日ヨリ同四辰八月朔日迄毛利主膳トアリ

二十一日三吉五郎兵衛宅ヨリ發火長府堀内外ノ町家小給人共三百餘戶燒亡

二十八日高力隆長松平忠昭ニ所領長崎ニ近キヲ以テ櫓船着岸ノトキ人數ヲ出サシ

德川史十

德川十五代史七月二十八日閑老ヨリ長崎奉行島田久太郎櫓船長崎着岸ノトキ

人數差出ニ關シ伺ヘ下知狀アリ略ス

八月朔日諸臣八朔ヲ祝シ登城公病アリ謁見ナシ

三日松平謙岐守城下讃州高松城雷火ニ罹リ矢倉及多門六十間燒亡屋町敷數ヶ所落

雷ノ旨大阪留守居高須八郎左衛門ヨリ通報アリ

二十四日歸城ヲ祝シ諸寺院登城謁見

同日榎本遠江當職在勤中明曆三酉ノ五月ヨリ寛文二寅ノ八月迄六ケ年ノ間御仕置
銀藏納ノ目錄左ノ如シ

一銀百貫目

右明曆四五月二十八日納之御遣銀方坪井彌左衛門山根半左衛門より渡狀之前

一銀六拾貫目

右明曆四八月二十五日に納之但明曆三ノ殘米御國中にて少宛賣付候代銀取集
納置分御遣銀方山本與一左衛門佐村長右衛門渡狀之前

一小判千兩

銀に六拾六貫五百八拾目但壹兩ニ付六十六匁ニ五分八厘宛

右萬治元十月十六日納之但明曆三ノ殘米大阪差上せ賣立代銀爰元取下シ納置
分御遣銀方山本與一左衛門佐村長右衛門渡狀之前

一銀四拾貫目

右萬治元十月二十五日に納之明曆三ノ殘米并古大豆賣付代銀取集納置分御遣

銀方右同人渡狀之前

一銀六拾貫目

右萬治元戌閏極月二十四日納之但明曆三ノ殘米之内御國中にて少賣付之代銀
并兒玉路淡大坂にて之替銀拾四貫目共に取合納置分御遣銀方右同人渡狀之前

一銀四拾貫目

右同日に納之但楊井平兵衛平田猪右衛門預り銀之内山代明曆三年分之理銀と
して百貫目貸付申候利銀之分納置楊井平田渡狀之前

一銀貳百八貫八百目七分五厘

右萬治貳三月十三日に納之但萬治元年分御物成之内銀子を以上納之分并諸浮
所務銀之分取合銀貳百貫目と大判貳拾枚を以納置分御遣銀方佐村長右衛門山
本與一左衛門渡狀之前

一銀百貫目

右萬治貳十月七日に納之但萬治元年分御物成之内當所町人共え御米少宛御賣

付代銀并小々之御拂物代銀共に取集納置分御遺銀方福原七郎兵衛河越字右衛門渡狀之前

一銀貳百貫目

右萬治三正月二十八日に納之榎本遠江當職存知之内明曆三ノ五月より萬治三ノ正月迄楊井平兵衛平田猪右衛門存之御利徳銀として納置分右兩人渡狀之前

一銀貳百貫目

右萬治三ノ三月二十五日に納之但榎本遠江當職存知之内明曆三ノ五月より萬治三ノ三月迄御貸銀之利分并於于時之御浮所務銀取合納置分御貸銀方水津半右衛門野上勘兵衛渡狀之前

一銀百貫目

右萬治三ノ三月二十五日に納之萬治貳ノ御物成銀子を以公納之分并同年殘米當所町人共え御賣付代銀共に取集納置ノ分御遺銀方河越字右衛門福原七郎兵衛渡狀之前

一銀百貫目

右萬治三五月七日に納之但萬治貳ノ御米之内當所町人共え御賣付之代銀取集納置分御遺銀方右兩人渡狀之前

一小判百兩

銀に六貫六百九拾目但壹兩に付六拾六匁九分宛

一壹分百切

銀に壹貫六百七拾七匁五分

但壹切に付拾六匁七分五厘宛

右萬治三ノ五月七日に納之但威盛院從江戸持參金子御理申出料替被仰付被遣分納置之楊井平兵衛平田猪右衛門渡狀之前

一銀百貫目

右萬治三ノ五月二十二日に納之但諸郡より近年納候御浮所務銀納置分御貸銀方水津半右衛門野上勘兵衛渡狀之前

一大判貳拾枚

銀に九貫七百五拾目

但壹枚に付四百八拾七匁五分宛

一小判九百兩

銀に六拾貫三拾目

但壹兩に付六拾七匁七分宛

一壹步百切

銀に壹貫六百七拾三匁

但壹切に付拾六匁七分三厘宛

三口之銀辻

合七拾壹貫四百五拾三匁

右萬治三五月二十八日に納之但萬治貳大坂御運送米代銀之内萩爲御用取下納
置分御遣銀方福原七郎兵衛河越宇右衛門渡狀之前

一銀貳百貫目

右萬治四ノ正月二十五日に納之但萬治三御米之内御國中にて諸所え賣付代銀
并御物成外之關銀山代遇上紙代銀として御貸付之元利取集納置分御遣銀方木
原又右衛門早水傳兵衛渡狀之前

一小判四百兩

銀にして貳拾六貫三百八拾目

但壹兩に付六拾五匁九分五厘宛

右同年同日に納之但先年紙座より銀三百貫目御かり置年々利銀被調遣候處に
萬治貳年之幕板本遠江存を以右之御借銀關切之利銀之分爰許取下納置分御遣
銀方木原又右衛門早水傳兵衛渡狀之前

一銀七拾九貫六百目

右萬治四卯月朔日に納之楊井平兵衛平田猪右衛門預り銀之内御藏納申付分帳
兩人渡狀之前

一銀貳拾貫四百目

右同年同日に納之但御家頼え被渡遣候馬之喰請料之者北國え大豆短束に參候付御藏之灰吹料替被仰付被遣候付而歩銀共納置分楊井平兵衛平田猪右衛門渡狀之前但右之灰吹は堅田安房御仕置被申付内にて候故別銀を以北之御藏え替之丁銀入替也

一小判五千兩

銀にして三百貳拾七貫五百八拾目

内貳千兩ハ壹兩ニ付六拾五匁五分四厘

右萬治四卯月二十二日納之但萬治三の御運送米直段高直に有之に付大阪御藏に御銀子大分有之由到來に付小判に料替被仰付御取下納置分御遣銀方木原又右衛門早水傳兵衛渡狀之前

一銀六拾貫目

右萬治四卯月二十八日に納之但山代遇上紙代銀として御かし付鹽田道可より

返納に付納置分但御遣銀方木原又右衛門早水傳兵衛渡狀之前

一銀八百四拾目

右萬治四五月十六日足銀として納置之但御遣銀方杉山傳左衛門野木清右衛門渡狀之前

一銀百貳拾貫目

右寛文元閏八月二十八日納之但御兩國御物成之外公納銀并小々之御賣付物代銀共に取集納置分御遣銀方杉山傳左衛門野木清右衛門渡狀之前

一銀貳百九貫四百八拾壹匁七分八厘三毛

右寛文元閏八月二十八日に納之但楊井平兵衛平田猪右衛門御算用相極候上殘銀トシテ納置分右兩人渡狀之前

一銀貳百四拾四匁貳分三厘三毛

右同年同日に納之但楊井平兵衛平田猪右衛門御算用相極候上出目錄有之付此御藏え納置分右兩人渡狀之前

一 小判四千七拾五兩

銀にして貳百五拾七貫貳百五拾四匁七分五厘

但壹兩に付六拾三匁壹分三厘宛

右同年同日に納之但萬治三ノ御買米之内大阪え差上せ賣立代銀南前殘米大阪に而賣立代銀并御船中御賄道具殘物賣立銀共に從大阪取下納置分岸八兵衛林忠右衛門渡狀之前

一 銀百三拾貫目

右寛文貳正月十七日に納之但山代萬治三年分公納銀之内算用縮之上七拾貫目餘上納并同所口方御利德銀二十六貫目其外寛文元年分御馳走米銀子に而上納之分共に取合納置分御遣銀方野木清右衛門杉山傳左衛門渡狀之前

一 銀百貫目

右寛文貳卯月二十八日に納之但寛文元年分之内諸所に而賣付代銀并御馳走米銀子を以上納之分取合納置分御遣銀方杉山傳左衛門野木清右衛門渡狀

之前

一 銀貳百貫目

右寛文貳五月二十八日に納之但御貸銀方田中權兵衛岡又右衛門預り之銀子かし餘候に付納置分右兩人渡狀之前

一 銀五拾貫目

右寛文貳五月二十八日納之但寛文元ノ御米之内萩三田尻山口町人共え賣付代銀取集納置分御遣銀方杉山傳左衛門野木清右衛門渡狀之前

一 銀四貫八百六拾貳匁三分三厘六毛

右同年同日に納之但能美吉右衛門尾本八郎兵衛先年御遣銀方存之節御算用狀算違有之付不足銀返納之分納置右兩人渡狀之前

一 大判五拾枚

銀にし貳拾貳貫三百拾五匁

但壹枚に付四百四拾六匁三分替

大阪より送り状之辻

一 小判八百貳拾五兩

銀にして五拾壹貫百八拾貳匁五分

内 五百兩ハ壹兩ニ付六拾貳匁
三百貳拾五兩ハ壹兩ニ付六拾貳匁
壹分替

一 壹歩八百切

銀にして拾貳貫八拾目但大阪此節之直段にして

三口之銀

已上八拾五貫五百七拾七匁五分

右寛文貳八月二十四日納之但殿様御下向前萩爲御用大判小判大阪より取下し

壹歩は最前より御遣銀方に有之分取合納置分福原七郎兵衛賀屋八右衛門渡狀

之前

一 大判拾枚

銀にして四貫四百六拾三匁但大阪此節之直段にして

一 銀五貫目

右同年同日に納之但御貸銀方岡又右衛門田中權兵衛預り之金銀之内足銀として納置分右兩人渡狀之前

一 銀拾九貫六百五拾九匁六分五厘貳毛

右同年同日に納之但岸八兵衛林忠右衛門中取銀南前寛文元之殘米賣立銀納置

分右兩人渡狀之前

并現銀高

三千三百五拾六貫五百四拾四匁五分六厘八毛

内

大判百枚

小判壹萬貳千三百兩

壹歩千切

銀貳千五百三貫貳百目五分六厘八毛

右榎本遠江當職存之間に納置候金銀辻如此
外に

一印子壹貫五百九拾貳匁

鍵共に

一阿州砂金三貫四拾目九分

一金之水風爐茶碗茶入共に

目にして七百五拾五匁九分

一金鋤一ツむく

目に四拾五匁五分

一天又銀三拾貳匁六分

一御公用銀三拾七匁五分

一銀錢三貫文内一文不足二
文かけ申候

右御遺銀方從先年有之を榎本遠江存を以相改此御藏え納置也

己上

右寛文貳年八月二十四日に相改大楯貳拾六に入組置申所如件

寛文貳年寅八月二十四日

中島忠兵衛

兒玉藤右衛門

平川半兵衛

右存知畢

同日

榎本遠江

右如此御帳仕立御寶藏御銀箱之内え納置候付而寫仕致進上之候以上

寅ノ

八月二十四日

中島忠兵衛

兒玉藤右衛門

平川半兵衛

榎本遠江

按ニ毛利氏財政ノ概要ヲ略述センニ慶長五年一亂後八ヶ國ヲ二ヶ國ニ減削セラ

レタルノ境遇ニ接シ秀就公初政ニケ國ヲ以テ國家ノ維持ハ頗ル困難ナリ元和九年ニ至テ遂ニ四千貫目ノ負債ヲ生スルニ及フ財政ノ整理愈焦眉ニ迫レリ是ニ於テ輝元公秀就公益田牛庵ヲ當職トシ又長府侯秀元ヲ召シ其衝ニ當ラシム牛庵等秀元ヲ戴キ庶政ニ從事シ拮据經營十有餘年遂ニ四千貫目ノ負債ヲ償ヒ更ニ城中ノ倉庫ニ非常軍用ノ貯金ヲ藏スルニ至レリ之ヲ御納戸倉ノ貯藏ト云是レ實ニ毛利氏寶藏金ノ起原ニシテ後來別途ノ非常基金此ニ創マル此時牛庵カ貯藏シタルハ銀子三百貫目金子大州列三百枚小列三千兩印子クサリ阿寛永九年牛庵愈老テ職ヲ辭スルニ及ヒ穴戸元兼代テ其職ニ當リ亦財政ニ阻勉シ寛永十四年ニ至ルノ間御納戸倉ノ貯蓄亦増加スル所アリ此年牛庵ノ子元堯越中亦元兼ニ代テ其職ヲ襲フ時ニ阿曾召就秀守因幡權ヲ江戸邸ニ專ラニスオアリ華奢ヲ好ム江戸邸費用益々多ク歲計之レカ爲メ漸ク乏シ正保三年士卒ノ祿ヲ減スルコト差アリ平均シテ十分ノ二ヲ減ス明曆三年板本就時江守其職ヲ襲クノ日ニ當テハ既ニ負債ヲ生シ納戸ノ貯藏亦殆ント空シ就時勵精牛庵ノ志ヲ繼キ行政ヲ整理シ法制ヲ修選シ施政ノ方針節儉ヲ基トシ拮

据經營亦數年ヲ費シ非常準備ノ要ヲ感シ歲計困迫ノ間ニ於テ百方苦計遂ニ寶藏ヲ作り傳家ノ寶器ヲ納メ御納戸倉ノ貯金ヲ移シテ之ニ置キ益々蓄殖ヲ勉ム寛文二年就時ノ其職ヲ退クニ當リ寶藏中藏スル所現金三千三百貫目ノ多キニ及ヘリ是レ就時一心ヲ經濟ノ點ニ披瀝シ盡瘁貢獻スル所之效果ナリト云フ

九月九日重陽節ニ因リ諸臣登城公病アリ謁見ナシ
十九日御鷹目付中井彦兵衛外三人米銀ヲ賜ル

同日平川清兵衛跡職貳百石實子忠兵衛へ深川七兵衛同五十石實子市之介へ平田九郎左衛門同實子傳十へ三戸勘右衛門同實子源兵衛へ命ス外ニ跡職ヲ命スルモノ一人二十日高須五郎兵衛數年京都御役勤勞ニヨリ高四拾七石加増百石ヲ領セシム
十月十九日來江戸隨從ヲ毛利隱岐兒玉淡路繁澤二郎兵衛ニ命ス手廻與頭兒玉三郎右衛門後任桂八郎兵衛ニ繁澤二郎兵衛後任國司與三兵衛ニ命ス榎本遠江地當職免サレ萩加判役ヲ命シ後任毛利主膳へ事務授受ヲ命ゼズ萩加判ヨリ當職兼勤寛文三年三月一日迄主膳遠江兩人ニテ當職勤務セリ

柿並年表十月十九日繁澤二郎兵衛ニ江戸當役ヲ命シ堅田安房ニ代ラシム相府年表
當役七月迄堅田安房七月本日江戸加判毛利隱岐見玉淡路再役トアリ

日不詳此月令ス德川史

スヘテ町中ノ塵芥イヨク請負ノ者ヘ申付ステサスヘシ自分船ヲ以テスツルコトハ一切相ナラズモシ自分ノ船ニテ捨又ハ川口ニ捨ル者アラバ請負人ヨリ其船取上シムベシ請負ノ外ニ私ニ塵芥スツル者ハ是又船取上ベシ又御堀石垣ノ邊ニ筏ヲ付ケ材木等引上ベカラズトナリ

又令ス出家修驗町中ニ住居寺檀ヲ設ケル者ハ速ニ吟味ヲ遂ケ名主月行事ヨリ申出ヘシ地借店借ニ至ルマデ不洩様ニスヘシ其類ノ者之ナキ町々ハ月行事ヨリ町年寄ニ申出ヘシ少シモ慮ルベカラズ

又令ス長刀二尺八寸九分以上大脇指一尺八寸以上大劔大角劔黃塗ノ鞘惣髮大額大月代ソリサケ若キ者ノ下髷侍ノ外絹布ヲ着シ巾廣ノ帯病者ノ外茶筌髮等スベテ禁止セシム犯ス者アラバ曲事ニ申付ベシトナリ

十一月七日淺草橋筋遠小石川牛込市ヶ谷赤坂虎ノ門山下幸橋田安門ヨリ内乘馬乘掛馬ノ外賤民農夫馬乘リ過ルコトヲ禁ス德川史

日不詳コノ歳暮萬石以上時服ヲ献セシム一萬石ヨリ四萬九千石マテ各一襲ヲサ、グベシ五萬石ヨリ上ハサキノ大災後仰出サレシマ、ニサ、グベシ各家贈遺ノ事コレモ災後ノ令旨ヲ守リイヨクトマムベシトナリ德川實紀

日不詳此月令ス德川史

町中火事ノ時東西南北火元ヨリ二町ノ間ニ疊戸障子ナド持出シ往來ノ妨ヲナスベカラズモシ相背クモノハ家持店借ノ者マテモ入牢スヘシ又御用ナキ者棒又ハ齋口ナドモチテ火事場ヘ出ルコトアリ又近邊町々ニ集マル者アラバ速ニ召捕リ曲事ニ行フベシ

十二月朔日諸臣登城歳暮ヲ祝ス公謁ヲ賜フ

六日前原四郎兵衛跡職貳百石實子半左衛門ヘ光永正左衛門同貳石石實子郷左衛門ヘ命ス

二十一日煤拂ノ式アリ公相杜準人宅へ臨訪

二十六日江戸裏役乃美五左衛門ヲ免シ篠川外記ヲシテ之ニ代ラシム相杜左門ニ記録所役ヲ命シ篠川外記ノ後任トス國司忠兵衛ニ公儀物聞ヲ命シ兵衛ノ同役トナス

二十七日福原貞右衛門跡職百石實子半左衛門ニ春日五郎左衛門同五十三石實子權之介ニ河上ト庵同五十三石養子宗全ニ三島九郎右衛門同二十石實子源六ニ天野藤右衛門同八十三石ノ内加増三十石沒收殘五十三石ヲ實子又右衛門ニ命ス外ニ米銀ヲ賜ル一人又跡職ヲ命スルモノ六人

二十八日桂善左衛門母衣役ヲ免シ桂五郎左衛門ヲ後任トシ鎗大將ヲ命ス三田尻都合役桂權左衛門ヲ免シ桂五郎左衛門ニ命ス工藤長左衛門ニ右筆役ヲ命ス葉若三吉ニ加冠シ大組ニ加ヘラレ四十三石下付福原又兵衛慰勞米三十石ヲ高六十石ニ直シ持掛リニ加ヘ百三十五石ヲ賜フ微祿ニテ目付役在勤セシニ病アリ辭職ノ請ヒヲ許シ使番ヲ命セラル飯田平右衛門高百石ノ加増引合五百石トナス多年公儀役在勤今

岡岡部半左衛門先組ヲ管セシメ來江戸隨從ヲ命シタルニ由ル飯田六兵衛高四拾石加増百石トナス數年勤績近年目付役特別ノ勞アレハナリ市川七右衛門高百石ヲ加ヘ引合三百石トナス高須平七高百石加増貳百四拾石ヲ賜フ諸役勤務江戸在勤多年ニ涉ル故ナリ山添宗積本知引合高六百石ト二拾人扶持ヲ賜フ公幼穉ノトキヨリ侍醫ニ從事シ數年江戸在勤勵精ノ功勞ニ對シ特例ニ出ト云外ニ家格昇進米銀賜ルモノ三人

柿並年表所載

月日不詳滿願寺宥俊法印ト圓清寺ト本末出入有之段々御沙汰六ヶ敷滿願寺ハ白瀧迄退院仕被居候ヲ色々ト御呼歸落著被仰付宥俊歸寺御黒印ヲ以テ願滿寺脇坊以下并一宗仕置諸觸寺法萬端如先規自滿願寺可申渡之旨被仰出相濟

右落着寛文二年

相府年表所載

月日不詳鶴江燈籠堂建ツ

本記拾遺附録

十一月朔日山代紙賣拂ニ關シ當職榎本遠江ヨリ藏元兩人ニ訓示左ノ如シ

山代中小杉紙賣拂之次第覺書

一紙賣拂候事紋あひ旁無紛様に相究置買手えも見せ候て賣渡可申事

一紙賣候日員數相定置候條番組員數旁無相違様賣拂可申事

一御一門衆組衆寄組衆之儀は紙賣候前日御藏元え一人宛被差出岸八兵衛林忠右

衛門役所にて届帳に相印を突置せ可被申候間當日相印の辻を以賣渡可申事

一大組衆之儀は多人數候條兼て組頭々々にて届帳に相印を突せ紙賣候前日御藏

元被差出岸八兵衛林忠右衛門え可被相渡候條當日相印引合賣渡可申事

一御藏元付衆之儀は兼て河越次郎兵衛手前にて届帳に相印を突せ紙賣候前日岸

林え渡置相印に引合賣渡可申事

付員數定之外に紙望之衆於有之者此方え承届時々可申渡候條其辻を以賣渡

可申事

付員數定より内買申衆之分は不及沙汰賣可申事

付定之員數時々不買請前後過不足之沙汰候てくりこし賣候儀一切停止之事

以上

紙賣日并員數定之事

一番霜月三日

御一門衆

組頭衆

寄組衆

兒玉 三郎右衛門

兩組

繁澤 次郎兵衛

福原 左近

組

組はつれ衆

二番同六日